

淨土三部經書下文

〈凡例〉

- (一) 本訓読は、「大雲校訂本」(三縁山聚英堂蔵版)を底本とした。
- (二) 本稿の科文は『科図・浄土三部経』(『科図・無量寿経』上下、『科図・観無量寿経』、『科図・阿弥陀経』)に基づく。
- (三) よこ括弧付数字(例七)、(六)は、その科に属する細分項目の数を表わす。つまり「法蔵説願(二)」とあれば、「法蔵説願」という科に二つの細分科目「請聽察」と「正説願」がある。
- (四) 四十八願の願数は、よこ括弧付アラビア数字で表わした。
- (五) 願名(四十八願の名称)は、了慧の『無量寿経鈔』(『浄土宗全書』第十四卷七一頁)に依った。
- (六) 漢字表記については、基本的には常用漢字に改めた。
*ただし、「弥」については次の通りとする。
阿彌陀・彌勒一仏、菩薩などの時は「彌」を使用する。
須彌山など右以外は「弥」を使用する。

佛説無量壽經 卷上

曹魏天竺三藏康僧鑑訳

訳人

経題

○第一

① 我れ聞ききかくのごときを。一時、佛、王舎城の耆闍崛山の中に住して、大比丘衆万二千人と俱なりき。② 一切の大聖、神通すでに達せり。③ その名を、尊者了本際・尊者正願・尊者正語・尊者大号・尊者仁賢・尊者離垢・尊者名聞・尊者善実・尊者具足・尊者牛王・尊者優楼頻伽迦葉・尊者伽耶迦葉・尊者那提迦葉・尊者摩訶迦葉・尊者舍利弗・尊者大目犍連・尊者劫賓那・尊者大住・尊者大淨志・尊者摩訶周那・尊者滿願子・尊者離障・尊者流灌・尊者堅伏・尊者面王・尊者異乘・尊者仁性・尊者嘉樂・尊者善来・尊者羅云・尊者阿難といいき。④ 皆かくのごとき等の上首たる者なり。

⑤ また大乘の衆もろの菩薩と俱なりき。普賢菩薩・妙徳菩薩・慈氏菩薩等のこの賢劫の中の一切の菩薩となり。また賢護等の十六正土あり。善思議菩薩・信

○第一 序分(二)

- ① 証信序
- ② 發起序(四)、明説時一
- ③ 明二教主一
- ④ 明二説処一
- ⑤ 明二徒衆(二)、声聞衆(四)、
総標
- ⑥ 総嘆
- ⑦ 別列
- ⑧ 別結
- ⑨ 菩薩衆(三)、列名(三)、標
- ⑩ 列

慧菩薩・空無菩薩・神通華菩薩・光英菩薩・慧上菩薩・智幢菩薩・寂根菩薩・
 願慧菩薩・香象菩薩・宝英菩薩・中住菩薩・制行菩薩・解脱菩薩なり。皆、普
 賢大士の徳に遵えり。諸もろの菩薩の無量の行願を具して、一切功德の法に安
 住せり。十方に遊歩して権方便を行じ、佛法蔵に入りて彼岸を究竟す。無量の世
 界において、等覚を成ずることを現す。兜率天に処して正法を弘宣し、かの天
 宮を捨て、神を母胎に降し、右脇より生ぜり。現に行くこと七歩するに、光
 明顕曜して、普く十方を照らし、無量の佛土、六種に震動す。声を挙げて自ら
 称すらく。吾れまさに世において、無上尊となるべしと。釈梵奉侍し、天人
 婦仰す。算計文芸射御を示現し、道術を博綜し、群籍を貫練す。後園に遊ん
 で、武を講い芸を試む。宮中色味の間に処することを現す。老病死を見て、世
 の非常を悟り、国と財と位とを棄てて、山に入りて道を学す。服乗の白馬・
 宝冠・瓔珞、これを遣わして還さしむ。珍妙衣を捨てて、法服を著し、鬚髪を
 剃除す。樹下に端坐して、勤苦すること六年なり。行、所応に如ら。五濁の刹に
 現じて、群生に随順するをもつて、塵垢あることを示して、金流に沐浴す。天、
 樹枝を按えて、攀じて池を出づることを得しむ。靈禽翼従して、道場に往詣
 す。吉祥の感徴、功祚を表章す。哀れんで施草を受けて、佛樹の下に敷きて、

- ① 結
 ② 嘆徳(一)、嘆三權実徳(三)、
 就三自分略嘆(一)、実徳
 ③ 權徳
 ④ 就三勝進広嘆(一)、実徳
 ⑤ 權徳(一)、総明
 ⑥ 別説(九)、上天相
 ⑦ 入胎相
 ⑧ 出胎相(四)、明三誕生
 ⑨ 現身威
 ⑩ 現三奇瑞
 ⑪ 現三口威
 ⑫ 明三衆婦
 ⑬ 童子相
 ⑭ 嫂妻相(一)、嫂妻、前事
 ⑮ 納妻、後事
 ⑯ 出家相(三)、出家、因
 ⑰ 出家相
 ⑱ 用三邪道
 ⑲ 成道相(四)、浄三垢身
 ⑳ 到三道場
 ㉑ 坐三草座

蹴か踏ふして坐ざす。大だい光こう明みやうを奮ふるつて、魔まをしてこれを知しらしむ。魔ま、官かん属ぞくを率ひきいて、
 来きたつて逼せめ試こころむ。制せいするに智ち力りきをもつてして、皆みな降くだ伏ぶくせしむ。微み妙みょうの法ほうを得えて、
 最さい正じやう覚かくを成じやうず。积じやく梵ぼん折せき勧かんして、法ほう輪りんを転てんぜんことを請しやうす。佛ほとけの遊ゆ歩ぶをもつて
 し、佛ほとけ吼こゑをもつて吼こゑす。法ほう鼓こを拍たたき、法ほう螺らを吹ふき、法ほう劍けんを執とり、法ほう幢どうを建たて、法ほう
 雷らいを震ふるい、法ほう電でんを曜かがやかし、法ほう雨うを澍そそぎ、法ほう施せを演のぶ。常じやうに法ほう音おんをもつて、諸もろ
 の世せ間けんを算かくせしむ。光こう明みやう普ふく無む量りやうの佛ほとけ土どを照てらし、一いつ切せきの世せ界かい、六ろく種しゆに震しん動どうす
 るに、すべて魔ま界かいを撰せつして、魔まの宮くう殿でんを動うごかす。衆しゆ魔ま、習しゆ怖ふして、帰き伏ぶくせずとい
 うことなし。邪じや網まうを擱きやく裂れつし、諸しよ見けんを消しょう滅めつし、諸もろのの塵じん勞らうを散さんじ、諸もろのの欲よく
 墮だを壞えす。法ほう城じやうを嚴げん護ごして、法ほう門もんを開かい闡せんす。垢かう汚わを洗せん濯じやくすること、顯けん明みやう清せい白はく
 にして、光こうく佛ほとけ法ほうを融ゆうじて、正じやう化けを宣せん流りうす。国こくに入いりて分ぶん衛ゑして、諸もろのの豊ぶん膳ぜん
 を獲う。功こう徳とくを貯たくわへて、福ふく田でんを示しめす。法ほうを宣せんべんと欲ほつして、欣こん笑しやうを現げんじ、諸もろのの
 法ほう薬やくをもつて、三さん苦くを救きう療りやうす。道だう意い、無む量りやうの功こう徳とくを顯けん現げんし、菩ぼ薩ざつに記きを授さずけ
 て、等とう正じやう覚かくを成じやうぜしむ。滅めつ度どを示しげん現げんして、拯じやう濟さいすること極きくわまりなし。諸しよ漏ろうを
 消しょう除じよして、衆しゆもろの徳とく本ほんを植うえしむ。功こう徳とくを具ぐ足そくすること、微み妙みょうにして量りやうり難がた
 し。諸しよ佛ほとけの国くにに遊あそんで、普あまねく道だう教きやうを現げんす。その修しゆする所ところの行ぎやう、清せい淨じやうにして穢けが
 れなし。譬たとえば幻げん師しの、衆しゆもろの異い像ざうを現げんするに、男なんを為なし女によを為なして、所しよと

- 32 成正覚一
- 33 転法輪(一)、天請てん法ぽう輪りん一
- 34 応おう、請しん起き、説せつ(一)、略りやく説せつ二
- 35 口業くつごふ化物けぶつ(三)、総
- 36 別
- 37 結
- 38 広説くわう二化物けぶつ一、四、以て二身しん
- 39 業ごふ一、伏ふく魔ま令しん帰き、以て二口業くつごふ一、令しん離り二煩惱ぼんごう一
- 40 四、明みやう二破邪はじやく一
- 41 明みやう二通正つうじやう一
- 42 結けつ二破邪はじやく一
- 43 以て二身業しんごふ一、令しん生せい二入善にんぜん一
- 44 以て二口業くつごふ一、令しん離り二生死しんじ一
- (二)、將しやう説せつ相さう
- 45 演えん二道教だうきやう一(三)、救苦きうこ教きやう
- 46 入道にんどう教きやう
- 47 獲くわくレ果くわ教きやう
- 48 入涅槃にんねはん
- 49 結けつ二嘆たん權けん実徳じつとく一(一)、実徳じつとく
- 50 權徳けんとく
- 51 嘆たん二利徳りとく一(二)、略嘆りやくたん(二)、別明べつみやう四、自行じきやう清淨せいじやう
- 52 化行けがきやう善巧ぜんかう(二)、開譬かいへい

して變ぜずということなく、本学明了にして、意の所為にあるがごとし。この諸もろの菩薩も、またかくのごとし。一切の法を学して、貫綜縷練し、所住安諦にして、化を致さずということなし。無数の佛土に、皆悉く普く現ず。いまだかつて慢恣せず。衆生を愍傷す。かくのごときの法、一切具足せり。菩薩の經典、要妙を究暢し、名稱普く至つて、十方を導御す。無量の諸佛、咸く共に護念したまう。佛の所住には、皆すでに住することを得。大聖の所立には、皆すでに立てり。如来の導化、各おの能く宣布し、諸もろの菩薩の為に、大師となつて、甚深の禅慧をもつて、衆人を開導す。諸法の性に通じ、衆生の相に達し、諸国を明了にす。諸佛を供養するに、その身を化現すること、なし電光のごとし。善く無畏の網を学して、幻化の法を曉了す。魔網を壊裂し、諸もろの纏縛を解く。声聞・縁覚の地を超越して、空無相無願三昧を得たり。善く方便を立てて、三乗を顯示し、この中下において、滅度を現す。また所作なく、また所有なく、不起不滅にして、平等の法を得たり。無量の総持、百千の三昧、諸根智慧を具足し成就し、広普の寂定あつて、深く菩薩の法蔵に入り、佛華嚴三昧を得たり。一切の經典を宣暢し演説す。深定門に住して、悉く現在の無量の諸佛を親たてまつり、一念の頃に、周徧せずということなし。諸も

- 53 合譬
- 54 顯二向、自行一
- 55 顯二向、化行一
- 56 総結
- 57 広嘆四、修二分、行二、
- 58 自利
- 59 利他
- 60 修二勝進行二、内徳
- 61 外徳二、化相
- 62 化徳
- 63 自分成徳四、修行方便
- 64 四、明三自利修二、修福行
- 65 修智行
- 66 明二利他修二、滅業、除惑
- 67 重弁二自利一
- 68 重明三利他一
- 69 修行成徳二、自利徳四、所証平等
- 70 所成衆多
- 71 所証深広
- 72 所成奇勝
- 73 利他徳
- 74 重弁二起修二、自利修利他修

ろの劇難と諸閑と不閑とを濟い、真実の際を分別し顯示するに、諸もろの如來の弁才の智を得たり。衆もろの言音を入りて、一切を開化す。世間、諸もろのあらゆる法を超過して、心常に度世の道に諦住す。一切の万物において、意に随つて自在なり。諸もろの庶類の爲に、不請の友となり、群生を荷負して、これを重擔とす。如來、甚深の法蔵を受持し、佛種性を護つて、常に絶えざらしむ。大悲を興して、衆生を慰れみ、慈弁を演べて、法眼を授け、三趣を杜ぎ、善門を開き、不請の法をもつて、諸もろの黎庶に施す。純孝の子の、父母を愛敬するがごとし。諸もろの衆生において、視ること自己のごとし。一切の善本、皆彼岸に度る。悉く諸佛無量の功德を獲たり。智慧聖明なること、思議すべからず。かくのごとき等の、菩薩大士称計すべからず、一時に來會せり。

⑧⑥ その時世尊、諸根悦豫し姿色清淨にして光顏巍巍たり。尊者阿難、佛の聖旨を承けて、すなわち座より起ちて偏袒右肩し長跪合掌して、佛にもうしてもうさく。今日世尊、諸根悦豫し姿色清淨にして光顏巍巍たること、明淨なる鏡の、影表裏に暢るがごとし。威容顯曜にして超絶したまえること無量なり。

いまだかつて殊妙なること今のごとくなるをば瞻觀たてまつらず。⑧⑧ ⑧⑧ 大聖。我が心に念言すらく。今日世尊、奇特の法に住し、今日世雄、諸佛の所住

⑦⑤ 重弁成徳(一)、成二自徳

⑦⑥ 成二化徳

⑦⑦ 勝進成徳(一)、所修行(一)、

自利修

⑦⑧ 利他修(三)、明レ法

⑦⑨ 開レ譬

⑧① 重頭

⑧② 所成徳(四)、福智、因

⑧③ 福智、果

⑧④ 福莊嚴

⑧⑤ 智、莊嚴

⑧⑥ 總結

⑧⑦ 正発起(六)、如來現相

⑧⑧ 阿難請問(一)、恠相、異レ昔

⑧⑨ 彰二已所念(三)、啓レ佛令レ知 念佛所得

に住し、今日世眼、導師の行に住し、今日世英、最勝の道に住し、今日天尊、如来の徳を行じたまえり。去来現の佛、佛と佛と相念じたまう。今の佛も、諸佛を念じたまうことなきことを得んや。何が故ぞ威神の、光光たることすなわちしかるや。ここに於いて世尊、阿難に告げてのたまわく。云何ぞ、阿難。諸天汝に教えて、来つて問わしむるや。自ら慧見をもつて、威顔を問うや。阿難、佛にもうさく。諸天の、来つて我れに教える者あることなし。自ら所見をもつて、この義を問いたてまつるのみ。佛のもうさく。善きかな阿難。問う所、甚だ快し。深智慧を発して真妙の弁才あり。衆生を愍念するをもつて、この慧義を問えり。如来無尽の大悲をもつて、三界を矜哀す。所以に世に出興して、光く道教を聞き、群萌を拯わんと欲して、恵むに眞実の利をもつてす。無量億劫にも、値い難く見難し。なお靈瑞華の、時時すなわち出づるがごとし。今問う所は、饒益する所多くして、一切の諸天人を開化す。阿難、まさに知るべし、如来正覚は、その智量り難くして、導御する所多し。慧見無礙にして、能く退絶することなし。一准の力をもつて、能く寿命を住むること、億百千劫、無数無量にして、またこれに過ぎたり。諸根悦豫して、もつて毀損せず、姿色不変にして、光顔異なることなし。所以は何ん。如来は定慧究暢して極まりなし。一

90 念問所為(二)、念二所為一

91 問二所為一

92 如来審問

93 阿難実答

94 如来嘆許(三)、嘆所問一(三)、嘆慧問一

95 挙二難値(二)、法

96 譬

97 歎二問益一

98 対二請問(二)、述二成請問(二)、述所問

99 述二所見一

100 挙二因結果

切さいの法ほうにおいて、自在じざいを得えたり。阿難あなん、諦あきらかに聴きけ、今いま汝なんじが為ために説とかん。対こたえ
てもうさく。しかり。願がん樂ぎょうすらく、聞ききたてまつらんと欲ほつす。

○第二

佛ほつ、阿難あなんに告つげたまわく。乃ない往おう過去かこ、久遠くおん無量むりょう、不可ふか思議しぎ無央むおう劫しゆこちうに、錠じやう光こう如に
来らい、世よに興こう出して、無量むりょうの衆生しゆじやうを教化きやうけし度ど脱だつして、皆みな、得道とくどうせしめて、すな
わち滅度めつどを取りたまえり。次つぎに如來こらい有ます。名なづけて光遠こうおんという。次つぎをば月光がっこうと
名なづけ、次つぎをば栴檀せんたん香かうと名なづけ、次つぎをば善山ぜんせん王おうと名なづけ、次つぎをば須弥しゆみ天てん冠かんと名なづ
け、次つぎをば須弥しゆみ等とう曜りやうと名なづけ、次つぎをば月色がしきと名なづけ、次つぎをば正念しやうねんと名なづけ、次
をば離垢りくと名なづけ、次つぎをば無著むじやくと名なづけ、次つぎをば龍天りゆうてんと名なづけ、次つぎをば夜光やこうと
名なづけ、次つぎをば安明あんみやう頂ちやうと名なづけ、次つぎをば不動地ふどうぢと名なづけ、次つぎをば瑠璃るり妙華みやうけと
名なづけ、次つぎをば瑠璃るり金こん色しきと名なづけ、次つぎをば金藏こんざうと名なづけ、次つぎをば欲光えんこうと名なづけ、
次つぎをば欲根えんこんと名なづけ、次つぎをば地動ぢどうと名なづけ、次つぎをば月像がつざうと名なづけ、次つぎをば日音につとんと
名なづけ、次つぎをば解脫げだつ華けと名なづけ、次つぎをば莊嚴しやうげん光明こうみやうと名なづけ、次つぎをば海覺かいかく神通じんずうと
名なづけ、次つぎをば水光すいこうと名なづけ、次つぎをば大香だいかうと名なづけ、次つぎをば離塵垢りじんくと名なづけ、次つぎ
をば捨厭しゃえん意いと名なづけ、次つぎをば宝欲ほうよくと名なづけ、次つぎをば妙頂みやうちやうと名なづけ、次つぎをば勇立ゆうりつ
と名なづけ、次つぎをば功德くどくじ持慧ちえと名なづけ、次つぎをば蔽日へいちがつ月光げんこうと名なづけ、次つぎをば日月にちがつ瑠璃るり

①勅ちやくレ聴ちやう説せつ

②阿難樂聞

○第二正宗

① 明みやう所行しゆじやう、明みやう勝因しやういん

(一)、明みやう三發願さんぱつげん緣げん、指しゆ

初時

② 列りやく三諸佛しよほつ、列りやく二已滅にいめつ

佛ほつ、列りやく

光と名づけ、次をば無上瑠璃光と名づけ、次をば最上首と名づけ、次をば菩提華と名づけ、次をば月明と名づけ、次をば日光と名づけ、次をば華色王と名づけ、次をば水月光と名づけ、次をば除癡瞑と名づけ、次をば度蓋行と名づけ、次をば淨信と名づけ、次をば善宿と名づけ、次をば威神と名づけ、次をば法慧と名づけ、次をば鸞音と名づけ、次をば師子音と名づけ、次をば龍音と名づけ、次をば処世と名づく。③ かくのごとき諸佛、皆悉くすでに過ぎたまえり。

④ その時に、次に佛有す。世自在王如来、応供、等正覚、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊と名づく。⑤ 時に國王あり。佛の説法を聞きて、心に悦豫を懷き、すなわち無上正眞の道意を發し、⑥ 國を棄て王を捐てて、行じて沙門となる。号づけて法藏という。高才勇哲にして、世と超異せり。⑦ 世自在王如来の所に詣でて、佛足を稽首し、右に繞ること三市、⑧ 長跪し合掌して、頌をもつて讚じてもうさく。

⑨ 光顏巍巍として、

かくのごとき欲明、

日月摩尼の

威神極まりなし。

与に等しき者なし。

珠光欲耀なるも、

③ 結

④ 奉_レ所_レ值_レ佛_一

⑤ 明_レ發願_レ相_レ(二)、地前發

心_レ(四)、聞法發心

⑥ 出家修道

⑦ 詣_レ佛_レ禮拜

⑧ 讚_レ佛_レ發願_レ(四)、與_レ讚_レ方便_一

⑨ 嘆_レ佛_レ功德_レ(二)、讚嘆_レ(三)、嘆_レ三身業_一

皆悉く隠蔽して

如来の容顔は、

⑩ 正覚の大音

⑪ 戒聞精進、

威徳侶なく、

深諦として善く

深を窮め奥を尽くして、

⑫ 無明と欲と怒と、

人雄師子、

功勲広大にして、

⑬ 光明の威相、

願わくは我れ作佛して、

⑭ 生死を過度して、

布施調意、

⑮ かくのごときは三昧と

吾れ誓う、佛を得るまでに、

なおし聚墨のごとし。

世に超えて倫なし。

響十方に流る。

三昧智慧、

殊勝希有なり。

諸佛の法海を念じ、

その涯底を究む。

世尊は永くなし。

神徳無量なり。

智慧深妙なり。

大千を震動したまう。

聖法王に斉しく、

解脱せずといふことなからん。

戒忍精進、

智慧とを上れたりとす。

普くこの願を行じて、

⑩ 嘆ニ口業一

⑪ 嘆ニ意業一

⑫ 結嘆

⑬ 明ニ己所求(一)、求ニ佛

身(二)、上求菩提(二)、求ニ

佛果一

⑭ 求ニ佛因一

⑮ 下化衆生

一切の恐懼に、

①⑥ たとい佛あつて、

無量にして大聖

一切の

道を求めて

①⑦ 譬えば恒沙のごとくなる、

また不可計

光明 悉く照らして、

①⑧ かくのごとく精進にして、

我が作佛の

その衆、奇妙にして、

①⑨ 国、泥洹のごとくにして、

我れまさに

十方より来生せんもの、

②① すでに我が国に到らば、

幸わくは佛信明したまえ。

為に大安を作さん。

①⑥ 百千億万、

数恒沙のごとくならんに、

これ等の諸佛を供養せんより、

堅正にして御かずには如かず。

諸佛世界

①⑦ 無数の刹土あつて、

この諸もろの国に徧からん。

威神量り難からんに、

①⑧ 国土をして第一ならしめん。

道場 超絶し、

等双なからん。

①⑨ 一切を哀愍し度脱すべし。

心悅清淨にして、

快樂安穩ならしめん。

これ我が真証なり。

①⑥ 此拔頭勝

①⑦ 求淨土(一)、举所超諸土

①⑧ 求能超自土

①⑨ 求撰生一

②① 請佛証知一

願を彼れに発して、

所欲を力精せん。

十方の世尊、

智慧無礙なり。

常にこの尊をして、

我が心行を知らしめん。

たとい身を

諸もろの苦毒の中に止むとも、

我が行は精進にして、

忍んで終に悔いざらん。

②① 佛、阿難に告げたまわく。法蔵比丘、この頌を説きおわって、佛にもうしても

うさく。②② 佛、阿難に告げたまわく。法蔵比丘、この頌を説きおわって、佛にもうしても

広く經法を宣べたまえ。②④ 我れ無上正覚の心を発せり。願わくは佛、我がために、

土を撰取すべし。我れをして世において、速やかに正覚を成じ、諸もろの生

死、勤苦の本を抜かしめたまえ。佛、阿難に語げたまわく。時に世饒王佛、法

蔵比丘に告げたまわく。汝が修行する所の莊嚴佛土、汝自らまさに知るべ

し。②⑥ 比丘、佛にもうさく。この義、弘深にして、我が境界にあらず。ただ願わ

くは世尊、広く為に諸佛如来の淨土の行を敷演したまえ。我れこれを聞きおわ

つて、まさに説のごとく修行して、所願を成満すべし。②⑦ その時、世自在王佛、

その高明の志願の深広なることを知らしめして、②⑧ すなわち法蔵比丘の為に、經

②① 地上発心(ハ)、法蔵請説

(二)、結前生後

②② 正請三經法(三)、挙三発

心一

②③ 請三宣説一

②④ 彰三所求一

②⑤ 如来返答

②⑥ 法蔵重誓

②⑦ 如来為説(一)、説由

②⑧ 正説(二)、挙譬勵中心

を説いてのたまわく。譬えば大海のごときも、一人升量して、劫数を経歴せば、なお底を窮めて、その妙宝を得べし。人、至心あつて、精進に道を求めて止まずんば、会ずまさに剋果すべし。何れの願か得ざらんと。ここに於いて世自在王佛、すなわち為に広く二百一十億の諸佛刹土の天人の善悪、国土の麤妙を説いて、その心願に於いて、悉く現じてこれを与えたまふ。時にかの比丘、佛の所説の敵浄の国土を聞き、皆悉く親見して、無上殊勝の願を超発す。その心寂靜にして、志所著なく、一切世間、能く及ぶ者なし。五劫を具足して、莊嚴佛国清浄の行を思惟し撰取す。阿難、佛にもうさく。かの佛の国土の寿量幾何ぞや。佛ののたまわく。その佛の寿命、四十二劫なり。時に法蔵比丘、二百一十億の諸佛刹土の清浄の行を撰取す。かくのごとく修しおわつて、かの佛の所に詣でて、稽首して足を礼し、佛に繞ること三匝、合掌して住し、佛にもうしてもうさく。世尊。我れすでに莊嚴佛土の清浄の行を撰取す。佛、比丘に告げたまわく。汝、今説くべし。よろしく知るべし、この時なり。一切の大衆を發起し悦可せしめよ。菩薩聞きおわらば、この法を修行して、よつて無量の大願を満足することを致さん。比丘、佛にもうさく。ただ聴察を垂れたまへ。我が所願のごとく、まさに具にこれを説くべし。

29 説レ法現レ土

30 開法発願四、開法見土、

31 明レ発二勝願(三)、正発二

六八一

32 彰二発願、位一

33 彰二能発、時一

34 問答決レ疑

35 結二勝発願一

36 詣レ佛説レ願(三)、請レ將説レ願

37 如来勸レ説

38 法蔵説レ願(一)、請二聴察一

③9 もし我れ佛を得たらんに、くに国に地獄・餓鬼・畜生あらば、しょうがくと正覚を取らじ。

④0 もし我れ佛を得たらんに、こくちゆう国中の人天、じゆじゆう寿終の後、また三悪道に更らば、しょう正

覚を取らじ。

④1 もし我れ佛を得たらんに、こくちゆう国中の人天、こじとと悉く真金色ならずば、しょうがくと正覚を取らじ。

らじ。

④2 もし我れ佛を得たらんに、こくちゆう国中の人天、ぎようしきふ形色不同にして、こうしゆ好醜あらば、しょうがくと正覚

を取らじ。

④3 もし我れ佛を得たらんに、こくちゆう国中の人天、しゆくみよう宿命を識らず、しも下、ひやくせんのくなゆた百千億那由他諸

劫の事を知らざるに至らば、しょうがくと正覚を取らじ。

④4 もし我れ佛を得たらんに、こくちゆう国中の人天、てんげん天眼を得ず、しも下、ひやくせんのくなゆた百千億那由他諸佛

の国を見ざるに至らば、しょうがくと正覚を取らじ。

④5 もし我れ佛を得たらんに、こくちゆう国中の人天、てんに天耳を得ず、しも下、ひやくせんのくなゆた百千億那由他の諸

佛の所説を聞き、こじとと悉く受持せざるに至らば、しょうがくと正覚を取らじ。

④6 もし我れ佛を得たらんに、こくちゆう国中の人天、けんた见他心智を得ず、しも下、ひやくせんのくなゆた百千億那由他

諸佛国中の衆生の心念を知らざるに至らば、しょうがくと正覚を取らじ。

④7 もし我れ佛を得たらんに、こくちゆう国中の人天、じんそく神足を得ず、いちねん一念の頃において、しも下、

④7 神境智通(9)

④6 他心智通(8)

④5 天耳智通(7)

④4 天眼智通(6)

④3 宿命智通(5)

④2 無有好醜(4)

④1 悉皆金色(3)

④0 不更惡趣(2)

無三惡趣(1)

百千億那由他の諸佛の国を超過すること能わざるに至らば、正覚を取らじ。

④⑧ もし我れ佛を得たらんに、國中の人天、もし想念を起し、身を貪計せば、正

覚を取らじ。

④⑨ もし我れ佛を得たらんに、國中の人天、定聚に住し、必ず滅度に至らずんば、

正覚を取らじ。

⑤⑩ もし我れ佛を得たらんに、光明能く限量あつて、下、百千億那由他諸佛の国

を照らさざるに至らば、正覚を取らじ。

⑤⑪ もし我れ佛を得たらんに、寿命能く限量あつて、下、百千億那由他劫に至ら

ば、正覚を取らじ。

⑤⑫ もし我れ佛を得たらんに、國中の声聞、能く計量あつて、下、三千大千世界

の声聞・縁覚、百千劫において、悉く共に計校して、その数を知るに至ら

ば、正覚を取らじ。

⑤⑬ もし我れ佛を得たらんに、國中の人天、寿命能く限量なからん。その本願あ

つて、脩短自在ならんをば除く。もししからずんば、正覚を取らじ。

⑤⑭ もし我れ佛を得たらんに、國中の人天、乃至不善の名あることを聞かば、正

覚を取らじ。

④⑧ 速得漏尽(10)

④⑨ 住正定聚(11)

⑤⑩ 光明無量(12)

⑤⑪ 寿命無量(13)

⑤⑫ 攝衆生願(14)、声聞無數

(14)

⑤⑬ 眷屬長寿(15)

⑤⑭ 無諸不善(16)

もし我れ佛を得たらんに、十方世界の無量の諸佛、悉く咨嗟して、我が名を称せずんば、正覚を取らじ。

55 撰法身願(一)、諸佛稱揚

もし我れ佛を得たらんに、十方の衆生、至心に信樂して、我が国に生ぜんと欲して、乃至十念せんに、もし生ぜずんば、正覚を取らじ。ただ五逆と誹謗正

56 撰衆生願(三)、念佛往生

法とを除く。

(18)

もし我れ佛を得たらんに、十方の衆生、菩提心を發し、諸もろの功徳を修し、至心に發願して、我が国に生ぜんと欲せんに、壽終の時に臨んで、もし大衆の与に圍繞せられて、その人の前に現ぜずんば、正覚を取らじ。

57 来迎引接(19)

もし我れ佛を得たらんに、十方の衆生、我が名号を聞きて、念を我が国に係せずんば、正覚を取らじ。

58 係念定生(20)

もし我れ佛を得たらんに、国中の人天、悉く三十二大人の相を成滿せずんば、正覚を取らじ。

59 三十二相(21)

もし我れ佛を得たらんに、他方佛土の諸もろの菩薩衆、我が国に來生せば、究竟して必ず一生補処に至らん。その本願あつて、自在の化する所、衆生の為の故に、弘誓の鎧を被て、徳本を積累し、一切を度脱し、諸佛の国に遊んで、

60 必至補処(22)

菩薩の行を修し、十方の諸佛如来を供養し、恒沙無量の衆生を開化して、無上正眞の道を立してしめんをば除く。常倫諸地の行を超出し、現前に普賢の徳を修習せん。もししからずんば、正覚を取らじ。

① 我れ佛を得たらんに、國中の菩薩、佛の神力を承けて、諸佛を供養せんに、一食の頃に、徧く無数無量那由他の諸佛の国に至ること能わずんば、正覚を取らじ。

② 我れ佛を得たらんに、國中の菩薩、諸佛の前に在って、その徳本を現ぜんに、諸もろの欲求する所の供養の具、もし意のごとくならずんば、正覚を取らじ。

③ 我れ佛を得たらんに、國中の菩薩、一切智を演説すること能わずんば、正覚を取らじ。

④ 我れ佛を得たらんに、國中の菩薩、金剛那羅延身を得ずんば、正覚を取らじ。

⑤ 我れ佛を得たらんに、國中の人天、一切の万物、嚴浄光麗に、形色殊特にして、微を窮して妙を極めて、能く称量することなからん。その諸もろの衆生、乃至天眼を逮得するも、能く明了に、その名数を弁ずることあらば、正

① 供養諸佛(2)

② 供具如意(24)

③ 説一切智(25)

④ 那羅延身(26)

⑤ 明二名数多一

⑤ 須人、所須嚴浄(2)、拳三能

覚を取らじ。

⑧⑧ もし我れ佛を得たらんに、國中の菩薩乃至少功德の者、その道場樹の無量の

光色あつて、高さ四百万里なるを知見すること能わずんば、正覚を取らじ。

⑧⑨ もし我れ佛を得たらんに、國中の菩薩、もし経法を受説し、諷誦持説して、

弁才智慧を得ずんば、正覚を取らじ。

⑦⑩ もし我れ佛を得たらんに、國中の菩薩、智慧弁才、もし限量すべくんば、正

覚を取らじ。

⑦⑪ もし我れ佛を得たらんに、国土清淨にして、皆悉く十方一切無量無数不

可思議の諸佛世界を照見せんこと、なおし明鏡をもつてその面像を觀るがご

とくならん。もししからずんば、正覚を取らじ。

⑦⑫ もし我れ佛を得たらんに、地より已上、虚空に至るまで、宮殿樓觀、池流華

樹、國中のあらゆる一切の万物、皆無量の雜宝、百千種の香をもつて、共に合

成し、嚴飾奇妙にして、諸もろの人天に超えん。その香、普く十方世界に熏じ

て、菩薩聞く者は、皆佛行を修せん。もしかくのごとくならずんば、正覚を取

らじ。

⑦⑬ もし我れ佛を得たらんに、十方無量不可思議の諸佛世界の衆生の類、我が光

⑧⑧ 見道場樹

⑧⑨ 得弁才智

⑦⑩ 智弁無窮

⑦⑪ 撰淨土願(一)、国土清淨

(3)

⑦⑫ 国土嚴飾(五)、華二莊

嚴、在処一

⑦⑬ 明三所有莊嚴

⑦⑭ 明二色香具足

⑦⑮ 比校顯勝

⑦⑯ 別、華二香徳

⑦⑰ 撰衆生願(三)、觸光柔軟

(3)

明を蒙つて、その身に触れん者は、身心柔軟にして、人天に超過せん。もししからずんば、正覚を取らじ。

もし我れ佛を得たらんに、十方無量不可思議の諸佛世界の衆生の類、我が名字を聞きて、菩薩の無生法忍、諸もろの深総持を得ずんば、正覚を取らじ。

もし我れ佛を得たらんに、十方無量不可思議の諸佛世界に、それ女人あつて、我が名字を聞きて、歡喜信樂して、菩提心を発し、女身を厭惡せんに、壽終の後、また女像とならば、正覚を取らじ。

もし我れ佛を得たらんに、十方無量不可思議の諸もろの菩薩衆、我が名字を聞きて、壽終の後、常に梵行を修して、佛道を成ずるに至らん。もししからずんば、正覚を取らじ。

もし我れ佛を得たらんに、十方無量不可思議の諸佛世界の諸天人民、我が名字を聞きて、五体投地し、稽首作礼し、歡喜信樂して、菩薩の行を修せんに、諸天世人、敬いを致さずと云ふことなからん。もししからずんば、正覚を取らじ。

もし我れ佛を得たらんに、國中の人天、衣服を得んと欲せば、念に随つてすなわち至らん。佛の所讚のごとくなる応法の妙服、自然に身にあらん。もし裁縫

76 聞名得忍 64

79 女人往生 63

80 常修梵行 60

81 人天致敬(7)、举三聞名、行一

82 明レ得ニ他敬ニ

83 衣服隨念 68

擣染浣濯することあらば、正覚を取らじ。

④ もし我れ佛を得たらんに、國中の人天、受くる所の快樂、漏尽比丘のごとく

ならずんば、正覚を取らじ。

⑤ もし我れ佛を得たらんに、國中の菩薩、意に随つて十方無量嚴淨の佛土を見

んと欲せば、時に応じて願のごとく、宝樹の中において、皆悉く照見せんこ

と、なおし明鏡をもつて、その面像を覩るがごとくならん。もししからずん

ば、正覚を取らじ。

⑥ もし我れ佛を得たらんに、他方国土の諸もろの菩薩衆、我が名字を聞きて、

佛を得るに至るまで、諸根闕陋して具足せずんば、正覚を取らじ。

⑦ もし我れ佛を得たらんに、他方国土の諸もろの菩薩衆、我が名字を聞きて、

皆悉く清淨解脱三昧を逮得せん。この三昧に住して、一たび意を発さん頃

に、無量不可思議の諸佛世尊を供養して、定意を失せざらん。もししからずん

ば、正覚を取らじ。

⑧ もし我れ佛を得たらんに、他方国土の諸もろの菩薩衆、我が名字を聞きて、

壽終の後、尊貴の家に生ぜん。もししからずんば、正覚を取らじ。

⑨ もし我れ佛を得たらんに、他方国土の諸もろの菩薩衆、我が名字を聞きて、

④ 受樂無深 39

⑤ 見諸仏土 40

⑥ 諸根具足 41

⑦ 住定供仏 42(三)、明二得定

⑧ 明二供仏

⑨ 結二定供

⑩ 生尊貴家 43

⑪ 具足徳本 44

歡喜踊躍して、菩薩の行を修し、徳本を具足せん。もししからずんば、正覚を取らじ。

もし我れ佛を得たらんに、他方国土の諸もろの菩薩衆、我が名字を聞きて、皆悉く普等三昧を速得せん。この三昧に住して、成佛に至るまで、常に無量不可思議の一切の諸佛を見たてまつらん。もししからずんば、正覚を取らじ。

もし我れ佛を得たらんに、國中の菩薩、その志願に随つて、聞かんと欲する所の法、自然に聞くことを得ん。もししからずんば、正覚を取らじ。

もし我れ佛を得たらんに、他方国土の諸もろの菩薩衆、我が名字を聞きて、すなわち不退転に至ることを得ずんば、正覚を取らじ。

もし我れ佛を得たらんに、他方国土の諸もろの菩薩衆、我が名字を聞きて、すなわち第一・第二・第三法忍に至ることを得ず、諸仏の法において、すなわち不退転を得ること能わずんば、正覚を取らじ。

佛、阿難に告げたまわく。その時、法蔵比丘、この願を説きおわつて、頌を説いてもうとく。

92 住定見佛(45)明二得定

93 明二見佛一

94 随意聞法(46)

95 得不退転(47)

96 得三法忍(48)一、明二得

97 明三不退一

98 立誓請證(二)結前生後

99 我れ超世の願を建つ。

この願満足せずんば、

100 我れ無量劫において、

普く諸もろの貧苦を濟わずんば、

我れ佛道を成ずるに至らば、

究竟して聞こゆる所なくんば、

101 離欲と深正念と

無上道を志求して、

102 神力大光を演べ、

三垢の冥を消除して、

かの智慧の眼を開きて、

103 諸もろの悪道を閉塞して、

功祚、満足することを成じて、

104 日月重暉を敢め、

衆の為に法蔵を開きて、

常に大衆の中において、

かならむ上道に至らん。

誓つて正覚を成ぜじ。

大施主となりて、

誓つて正覚を成ぜじ。

名声、十方に超えん。

誓つて正覚を成ぜじ。

淨慧との修梵行をもつて、

諸もろの天人師とならん。

普く無際の土を照らし、

広く衆もろの厄難を濟い、

この昏盲の闇を滅し、

善趣の門に通達せしめ、

威曜十方に朗らかなり。

天光も隠れて現ぜず。

広く功徳の宝を施し、

説法師子吼したまう。

99 正明^三誓請^(一)、立^レ誓

自要^(二)、拳^三自果^一、立^レ誓^(二)、

自徳

100 化徳

101 拳^二佛徳^一、須求^(二)、略

102 広^(一)、拳^三佛徳^一、四、拳^二佛化徳^一

103 拳^二佛^一、自徳^一

104 重拳^二化徳^一

⑩ 一切の佛を供養し、

願慧悉く成満して、

⑪ 佛の無礙智のごときは、

願わくは我が功慧の力、

⑫ この願もし剋果せば、

虚空の諸もろの天人

衆もろの徳本を具足し、

三界の雄となることを得たまえり。

⑬ 通達して照らしたまわすということなし。

この最勝尊に等しからん。

⑭ 大千まさに感動すべし。

まさに珍妙の華を雨らすべし。

⑯ 重拳自徳(一)、福智、因

⑰ 自在用

⑱ 願同佛

⑲ 約誓請レ証

⑳ 現瑞証誠(三)、結前生後

㉑ 現瑞応請

㉒ 出声嘆記

㉓ 総結レ誓願一

㉔ 明ニ勝行ニ(一)、修ニ浄土

行ニ(一)、陳レ前

㉕ 起行ニ(一)、総説

㉖ 別説ニ(一)、明ニ行果一

㉗ 正修因ニ(一)、長時修

㉘ 無余修

㉙ 修ニ法身行ニ(一)、別起レ

行四、離ニ煩惱ニ(一)、明ニ

自行ニ四、離ニ惑因縁一

佛、阿難に告げたまわく。法蔵比丘、この頌を説きおわるに、時に應じて普

地、六種に震動し、天より妙華を雨らして、もってその上に散ず。自然の音楽

あつて、空中に讚じていわく。決定して必ず無上正覚を成ぜん、と。ここに

いて法蔵比丘、かくのごときの大願を具足し修満して、誠諦虚しからず。世間

を超出して、深く寂滅を築えり。阿難、時にかの比丘、その佛の所の諸天と

魔梵と龍神との八部大衆の中において、この弘誓を發す。この願を建ておわつ

て、一向に志を専らにして、妙土を莊嚴す。修する所の佛国、恢廓廣大にし

て、超勝独妙なり。建立常然にして、無衰無変なり。不可思議兆載永劫に

において、菩薩の無量の徳行を積植す。欲覚・瞋覚・害覚を生ぜず。欲想・瞋

想・害想を起さず。色・声・香・味・触・法に著せず。忍力成就して、衆苦を
 計せず。少欲知足にして、染患癡なし。三昧常寂にして、智慧無礙なり。虚
 偽諂曲の心あることなし。和顔愛語して、意に先だつて承問す。勇猛精進に
 して、志願倦むことなく、専ら清白の法を求めて、もつて群生を惠利す。三
 宝を恭敬し、師長に奉事し、大莊嚴をもつて、衆行を具足し、諸もろの衆生を
 して、功德成就せしむ。空・無想・無願の法に住して、作もなく起もなし。法
 は化のごとしと観ず。麤言と自害と害彼と彼此俱害とを遠離し、善語と自利と利
 人と人我兼利とを修習す。国を棄て王を捐て、財色を絶去して、自ら六波羅蜜を
 行じ、人を教えて行ぜしむ。無央数劫に、功を積み徳を累ぬ。その生処に随つ
 て、意の所欲にあつて、無量の宝蔵、自然に発應し、無数の衆生を教化し安立
 して、無上正眞の道に住せしむ。あるいは長者居士、豪姓尊貴となり、ある
 いは刹利国君・轉輪聖帝となり、あるいは六欲天主乃至梵王となり、常に四事
 をもつて、一切の諸佛を供養し恭敬したてまつる。かくのごとぎの功德、称説
 すべからず。口氣香潔にして、優鉢羅華のごとし。身の諸もろの毛孔より、梅檀
 香を出だす。その香、普く無量の世界に熏す。容色端正にして、相好殊妙なり。
 ⑬⑭ その手より常に無尽の宝・衣服・飲食・珍妙華香・繪蓋幢幡、莊嚴の具を出だ

- ⑪⑩ 明二法対治一
- ⑪⑩ 離二煩惱体一
- ⑪⑩ 明二修対治一
- ⑪⑩ 明二化他一
- ⑪⑩ 修二善法(三)無間修
- ⑪⑩ 恭敬修
- ⑪⑩ 行成証
- ⑪⑩ 離惡業(二)、明二離過一
- ⑪⑩ 明二摺治一
- ⑪⑩ 修二善業(二)、自利
- ⑪⑩ 利他
- ⑪⑩ 總結レ行
- ⑪⑩ 明二勝果(二)、明二勝依
- 果一
- ⑪⑩ 明二勝正果(二)、功德果
- (二)、生勝(三)、列レ勝
- ⑪⑩ 明二行
- ⑪⑩ 結レ勝
- ⑪⑩ 身勝(三)、拳レ徳
- ⑪⑩ 明レ用

す。かくのごとき等の事、諸もろの天人に超えたり。一切の法において、自在を得たり。

阿難、佛にもうさく。法蔵菩薩、すでに成佛して、滅度を取りたまうとやせん。

いまだ成佛したまわずとやせん。今現に在すとやせん。佛、阿難に告げた

まわく。法蔵菩薩、今すでに成佛して、現に西方に在す。ここを去ること十万

億利なり。その佛の世界を名づけて安樂という。阿難また問いたてまつる。その

佛、成道より已来、幾ばく時を遷くるとやせん。佛のたまわく。成佛より已

来、凡そ十劫を歴たり。その佛の国土は、自然の七宝、金・銀・瑠璃・珊瑚・琥

珀・砗磲・碼瑙をもつて合成して地とせり。恢廓曠蕩として、限極すべからず。

悉く相雜廁し、転相入問せり。光赫焜耀として、微妙奇麗なり。清浄の莊

嚴、十方一切の世界に超踰せり。衆宝の中の精なり。その宝なおし第六天の宝

のごとし。またその国土には、須弥山および金剛鉄圍、一切の諸山なく、また大

海・小海・谿渠井谷なし。佛神力の故に、見んと欲すればすなわち現す。また

地獄・餓鬼・畜生、諸難の趣なく、また四時、春秋冬夏なし。不寒不熱にして、

常和調適なり。その時阿難、佛にもうしてもうさく。世尊。もしかの国土に

須弥山なくんば、その四天王および忉利天、何に依つてか住するや。佛、阿難に

137 結レ勝
138 智徳果

139 明三所成(一)、明三勝報一

(二)、総明三所成(一)、明三
佛身(二)、果成

140 久遠

141 明三所居(一)、明三所有一

142 明三所無(一)、正拳三所
無(三)、無二器穢一

143 無二趣穢一

144 無二時穢一

145 問答決レ疑(五)、阿難、仮

問

146 如来、反質

語げたまわく。第三燄天乃至色究竟天、皆何に依つてか住するや。阿難、佛にもうさく。行業果報、不可思議なればなり。佛、阿難に語げたまわく。行業果報、不可思議ならば、諸佛世界もまた不可思議なり。その諸もろの衆生、功德善力をもつて、行業の地に住す、故に能くしかるのみ。阿難、佛にもうさく。我れこの法を疑わず、ただ将来の衆生の為に、その疑惑を除かんと欲して、故らにこの義を問いたてまつる。

佛、阿難に告げたまわく。無量寿佛の威神光明、最尊第一なり。諸佛の光明、能く及びざる所なり。あるいは佛光あり。百佛世界あるいは千佛世界を照らす。要を取つてこれをいわば、すなわち東方恒沙佛刹を照らす。南西北方四維上下も、またかくのごとし。あるいは佛光あり。七尺を照らし、あるいは一由旬二三・四・五由旬を照らす。かくのごとく転倍して、乃至一佛刹土を照らす。この故に無量寿佛をば、無量光佛・无边光佛・無礙光佛・無对光佛・欲王光佛・清浄光佛・歡喜光佛・智慧光佛・不断光佛・難思光佛・無称光佛・超日月光佛と号したてまつる。それ衆生あつて、この光に遇う者は、三垢消滅し身意柔軟なり。歡喜踊躍して、善心生ず。もし三塗勤苦の処に在つて、この光明を見たてまつれば、皆休息を得て、また苦惱なし。寿終の後、皆解脱を蒙る。無量寿佛の

147 阿難実答

148 如来順説

149 顯二疑問意

150 別明三所成一(一)、明二佛身二(一)、佛光四、积迦讚

嘆(一)、光明(一)、標

151 弁(一)、挙二餘佛劣

152 顯二彌陀勝

153 光益(一)、現益(一)、利二

人天

154 利三塗一

155 当益

156 諸聖讚嘆

光明 顕赫にして、十方を照耀す。諸佛の国土に、聞こえずといふことなし。ただ我れ今、その光明を称するのみにあらず。一切の諸佛・声聞・縁覚・諸もろの菩薩衆も、咸く共に歎誉したまふこと、またかくのごとし。もし衆生あつて、その光明の威神功徳を聞きて、日夜に称説して至心不断なれば、意の所願に随つて、その国に生まれんことを得て、諸もろの菩薩・声聞大衆に、共に歎誉して、その功徳を称せられ、そのしかして後、佛道を得る時に至つて、普く十方の諸佛菩薩に、その光明を歎ぜられんこと、また今のごとくならん。佛ののたまわく。我れ無量寿佛の光明威神の巍巍殊妙なるを説くこと、昼夜一劫すとも、なおいまだ尽くすこと能わじ。

佛、阿難に語げたまわく。また無量寿佛の寿命長久にして、称計すべからず。汝むしろ知らんや。たとい十方世界の無量の衆生をして、皆人身を得せしめ、悉く声聞・縁覚を成就せしめて、すべて共に集会し、禅思一心に、その智力を竭くして、百千万劫に、悉く共に推算して、その寿命の長遠の数を計るとも、窮尽して、その限極を知ること能わじ。声聞・菩薩・天・人の衆の寿命の長短も、またかくのごとし。算数譬喩の能く知る所にあらず。また声聞・菩薩、その数量り難し。称説すべからず。神智洞達にして、威力自在なり。

157 衆生、称嘆(三)、明、自称

説一

158 生後蒙、嘆

159 果後蒙、嘆

160 総括、讚嘆一

161 佛寿(二)、標、二寿、長遠一

162 寄、事、顯、長

163 明、二徒、衆(二)、明、三長、寿一

164 明、二数、多(二)、総、明、二数

多(二)、挙、二数、多一

165 嘆、二其、徳一

能く掌中において、一切の世界を持せり。

佛、阿難に語げたまわく。かの佛の初会の声聞衆の數、稱計すべからず。

菩薩もまたしかり。今の大目犍連のごとき、百千万億無量無數あつて、阿僧祇

那由他劫において、乃至滅度まで、悉く共に計校すとも、多少の數を究了する

こと能わじ。譬えば大海の深広無量ならんに、もし人あつて、その一毛を拆い

て、もつて百分となし、一分の毛をもつて、一滴を沾取せんがごとし。意にお

いて云何んぞ、その滯る所の者を、かの大海においてするに、何れが多しとする

所ぞ。阿難、佛にもうさく。かの滯る所の水を、大海に比するに、多少の量、

巧曆の算數、言辞譬類の能く知る所にあらず。佛、阿難に語げたまわく。目連

等のごとき、百千万億那由他劫において、かの初会の声聞・菩薩を計つて、知

る所の數は、なおし一滴のごとく、その知らざる所は、大海の水のごとし。

またその国土には、七宝の諸樹、世界に周滿せり。金樹・銀樹・瑠璃樹・玻瓈

樹・珊瑚樹・碼碯樹・磈磈樹あり、あるいは二宝三寶乃至七宝、転共に合成せ

るあり。あるいは金樹の、銀葉華果なるあり。あるいは銀樹の、金葉華果なるあ

り。あるいは瑠璃樹あり、玻瓈を葉とし、華果またしかなり。あるいは水精樹

あり、瑠璃を葉とし、華果またしかなり。あるいは珊瑚樹あり、碼碯を葉とし、

106 別明三初会二四、直拳、

多

107 約二目連

108 開譬喩

109 合譬喩

110 明二極樂二、明二依報

土四、明三寶樹二、明二

諸寶樹二、列二諸寶樹二

二、拳三所依土

111 總標

112 純寶樹

113 雜寶樹二、標

114 列

華果けかまたしかなり。あるいは碼礪めらじゆ樹あり、瑠璃るりを葉はとし、華果けかまたしかなり。あ
 るいは碑礪しやこじゆ樹あり、衆宝しゆぼうを葉はとし、華果けかまたしかなり。あるいは宝樹ほうじゆあり、紫金しこん
 を本もととし、白銀びやくこんを茎くきとし、瑠璃るりを枝えだとし、水精すいしようを条こえだとし、珊瑚さんご
 を葉はとし、碑礪しやこを実このみとす。あるいは宝樹ほうじゆあり、白銀びやくこんを本もととし、瑠璃るり
 を華はなとし、碑礪しやこを実このみとす。あるいは宝樹ほうじゆあり、白銀びやくこんを本もととし、紫
 金しこんを枝えだとし、珊瑚さんごを条こえだとし、碼礪めらじゆを葉はとし、碑礪しやこを華はなとし、紫
 金しこんを実このみとす。あ
 るいは宝樹ほうじゆあり、瑠璃るりを本もととし、水精すいしようを茎くきとし、珊瑚さんごを枝えだとし、碼礪めらじゆ
 を葉はとし、紫金しこんを華はなとし、白銀びやくこんを実このみとす。あるいは宝樹ほうじゆあり、水精すいしよう
 を本もととし、紫金しこんを華はなとし、白銀びやくこんを茎くきとし、珊瑚さんごを条こえだとし、瑠璃るり
 を葉はとし、水精すいしようを華はなとし、珊瑚さんごを実このみとす。あるいは宝樹ほうじゆあり、碑礪しやこ
 を本もととし、紫
 金しこんを枝えだとし、白銀びやくこんを条こえだとし、珊瑚さんごを葉はとし、水精すいしようを本もととし、紫
 金しこんを茎くきとし、白銀びやくこんを枝えだとし、瑠璃るりを条こえだとし、水精すいしようを葉はとし、瑠璃るり
 を実このみとす。この諸もろの宝樹ほうじゆ、行行こうこう相値あひあい、茎き、茎き相望あひあみ、枝枝しし相準あひなえ、葉葉ようよう
 相向あひむかい、華華けけ相順あひしたがい、実実じつじつ相当あひあり、栄色ようしき光耀こうようとして、勝たえて視みるべからず。清しやう
 風ふう、時ときに発おこつて、五音ごおんの声こゑを出いだす。微妙みまうの宮商くうしやう、自然じねんに相和あひわせり。

①⑤ 総結

①⑥ 明し出「妙声」

①⑦ また無量寿佛の、その道場樹は、高さ四百万里なり。その本、周圍、五十
 由旬なり。枝葉、四もに布けること、二十万里なり。①⑧ 一切の衆宝、自然に合成
 せり。月光摩尼、持海輪宝、衆宝の王たるをもつて、これを莊嚴せり。条の間
 に周布して、宝璣路を垂れたり。百千万の色、種種に異変す。無量の光燄、照
 耀すること極まりなし。珍妙の宝網、その上に羅覆せり。一切の莊嚴、よろし
 きに随つて現ず。微風、徐く動いて、諸もろの枝葉を吹くに、無量の妙法の音
 声を演出す。その声、流布して、諸佛の国に徧す。その音を聞く者は、深法忍を
 得て、不退転に住す。佛道を成ずるに至るまで、耳根清徹にして、苦患に遭わ
 ず。①⑨ 目にその色を觀、耳にその音を聞き、鼻にその香を知り、舌にその味わいを
 嘗め、身にその光を触れ、心にその法をもつて縁するに、一切皆甚深法忍を得て、不
 退転に住す。佛道を成ずるに至るまで、六根清徹にして、諸もろの悩患なし。
 ①⑩ 阿難。もしかの国の人天、この樹を見る者は、三法忍を得。一つには音響忍。二
 つには柔順忍。三つには無生法忍なり。これ皆無量寿佛の威神力の故に、
 本願力の故に、満足願の故に、明了願の故に、堅固願の故に、究竟願の故な
 り。佛、阿難に告げたまわく。世間の帝王に、百千の音楽あり、転輪聖王より
 乃至第六天上の伎楽の音声、展転して相勝るること、千億万倍なり。第六天上

①⑦ 明道場樹(一)、明道

場相(一)、量相

①⑧ 体相

①⑨ 莊嚴

①⑩ 出声、説法

①⑪ 見聞獲益(一)、他方益

①⑫ 自国益(一)、縁樹得忍

①⑬ 列二得忍、別二

①⑭ 明二得忍、由二

①⑮ 比拔願勝

の万種の楽の音は、無量寿国の諸もろの七宝樹の一種の音声に如かざること、千億倍なり。また自然の万種の伎楽あり。またその楽の声、法音にあらざりということなし。清揚哀亮にして、微妙和雅なり。十方世界の音声の中に、最も第一とす。

①⑧ また講堂・精舎・宮殿・楼観あり。皆七宝の莊嚴、自然の化成なり。また眞珠・明月摩尼の衆宝をもつて、もつて交露とし、その上に覆蓋せり。内外左右に、諸もろの浴池あり。あるいは十由旬、あるいは二十・三十乃至百千由旬にして、縦広深淺、各おの皆一等なり。八功德水、湛然として盈満せり。清淨香潔にして、味わい甘露のごとし、黄金の池には、底に白銀の沙あり。白銀の池には、底に黄金の沙あり。水精の池には、底に瑠璃の沙あり。瑠璃の池には、底に水精の沙あり。珊瑚の池には、底に琥珀の沙あり。琥珀の池には、底に珊瑚の沙あり。碑磧の池には、底に碼碯の沙あり。碼碯の池には、底に碑磧の沙あり。白玉の池には、底に紫金の沙あり。紫金の池には、底に白玉の沙あり。あるいは二宝三宝乃至七宝、転共に合成せり。その池の岸上に、梅檀樹あり。華葉垂れ布いて、香氣、普く熏ず。天の優曇羅華・曇摩羅華・拘物頭華・分陀利華あり。雑色の光、茂わしうして、水上に弥覆せり、かの諸もろの菩薩および声

①⑧ 明二伎楽二(一)、総標二伎楽一

①⑦ 顯二法音妙一

①⑥ 明二音声勝一

①⑤ 明二宮殿二(一)、体相

①④ 莊嚴

①③ 明二宝池二(一)、明二宝池、

相四、量相

①② 水相

①① 莊嚴二、衆宝、莊嚴

①④ 衆草、莊嚴

①⑤ 資用四、淺深無碍

聞衆、もし宝池に入りて、意に水をして足を没めしめんと欲すれば、水すなわち
 足を没む。膝に至らしめんと欲すれば、すなわち膝に至る。腰に至らしめんと欲
 すれば、水すなわち腰に至る。頸に至らしめんと欲すれば、水すなわち頸に至
 る。身に灌がしめんと欲すれば、自然に身に灌ぐ。還復せしめんと欲すれば、水
 軋ち還復す。調和冷煖にして、自然に意に随つて、神を開き体を悦ばしめ、
 心垢を蕩除す。清明激潔にして、淨きこと形なきがごとし。宝沙映徹して、
 深しとして照らさずといふことなし。微瀾廻流して、転相灌注す。安詳として
 徐く逝きて、遅からず疾からず。波は無量自然の妙声を揚ぐ。その所応に随
 つて、聞かざる者なし。あるいは佛声を聞き、あるいは法声を聞き、あるいは僧
 声を聞き、あるいは寂靜の聲・空無我の聲・大慈悲の聲・波羅蜜の聲、あるい
 は十力無畏・不共法の聲・諸もろの通慧の聲・無所作の聲・不起滅の聲・無生
 忍の聲乃至甘露灌頂、衆もろの妙法の聲、かくのごとき等の聲、その所聞に稱
 つて、歡喜無量なり。清淨離欲、寂滅眞実の義に随順し、三宝・力・無所畏・
 不共の法に随順し、通慧・菩薩声聞所行の道に随順す。三塗苦難の名あるこ
 となく、ただ自然快樂の音のみあり。この故にその国を名づけて安樂という。
 阿難。かの佛の国土の諸もろの往生せる者は、かくのごときの清淨の色身、

- ①96 冷煖得レ中
- ①97 開レ神除レ垢
- ①98 淨、無二塵穢一
- ①99 廻流相注
- ②00 出声說法四、正出レ声
- ②01 応レ物、心(三)、標
- ②02 列
- ②03 結
- ②04 生レ物、善(二)明三順果(一)
- ②05 順二涅槃一
- ②06 順二菩提一
- ②07 明二順因一
- ②08 生レ物、衆(二)、明レ無二苦
- ②09 名一
- ②10 明レ有二樂音一
- ②11 挙レ名結レ徳
- ②12 約レ土明レ人(二)、明三新
- ②13 往報勝(一)、正報勝

諸もろの妙音声、神通功德を具足す。④ 処する所の宮殿、衣服飲食、衆もろの妙
 華香、莊嚴の具、第六天の自然の物のごとし。⑤ もし食せんと欲する時は、七宝
 の盃器、自然に前に在り。金・銀・瑠璃・碑磔・碼碯・珊瑚・琥珀・明月真珠、
 かくのごとき諸盃、意に随つて至り、百味の飲食、自然に盈満す。この食あ
 りといえども、実に食する者なし。ただ色を見、香を聞いて、意に食なりとおも
 えば、自然に飽足す。身心柔軟にして、味著する所なし。事おわれば化し去り、
 時至ればまた現す。かの佛の国土は、清淨安穩にして微妙快樂なり。無為泥
 洹の道に次げり。⑥ その諸もろの声聞・菩薩・天人、智慧高明に神通洞達し、
 威同じく一類にして、形異状なし。ただ余方に因順するが故に、天人の名あ
 り。⑦ 顔貌端正にして、世に超えて希有なり。容色微妙にして、天にあらず人に
 あらず、皆自然虚無の身、無極の体を受く。
 佛、阿難に告げたまわく。譬えば世間の貧窮乞人の、帝王の辺に在るがごと
 き、形貌容状、むしろ類すべきや。⑧ 阿難、佛にもうさく。もしこの人、帝王の
 辺に在らんに、羸陋醜惡にして、もつて喩とすることなきこと、百千万億不可
 計倍なり。しかる所以は、貧窮乞人は、底極廝下にして、衣は形を蔽さず、食は
 わずかに命を支う。飢寒困苦して、人理殆ど尽きなんとす。⑨ 皆前世に徳本を植え

④ 依報勝(一)、資具勝

⑤ 資用勝

⑥ 明二旧住報勝(一)、正報
勝(二)、明三内外勝一

⑦ 明レ超二穢土一

⑧ 比較頭勝(二)、貧人比二
帝王(一)、如来間
阿難答

ず、財を積んで施さず、富有にして益ます慳み、ただ唐らに得んと欲して、貪求して厭くことなく、あえて善を修せず、悪を犯して山のごとくに積めるに坐る。かくのごとくして寿終わりぬれば、財宝消散す。身を苦しめて聚積して、これが為に憂悩すれども、己において益なくして、徒らに他の有となる。善として怙むべきなく、徳として恃むべきなし。この故に死して悪趣に墮して、この長苦を受く。罪おわって出づることを得れども、生まれて下賤となり、愚鄙廝極にして、示れば人類に同じ。世間の帝王の、人中に独尊たる所以は、皆宿世、積徳の致す所に由る。慈恵あつて博く施し、仁愛あつて兼ね濟い、信を履み善を修して、違諍する所なし。ここをもつて寿終われれば、福、応じて善道に昇ることを得。天上に上生して、この福樂を享く。積善の余慶あつて、今、人となることを得て、適たま王家に生まれて、自然に尊貴なり。儀容端正にして、衆に敬事せられ、妙衣珍饈、心に随つて服御す。宿福の迫う所なり、故に能くこれを致す。

⑳ 佛、阿難に告げたまわく。汝が言、是なり。たとい帝王の、人中の尊貴にして、形色端正なりといえども、これを転輪聖王に比するに、甚だ鄙陋なりとす。かの乞人の、帝王の辺に在るがごとし。転輪聖王の威相殊妙は、天下第一

⑳ 如来述

㉑ 帝王比二輪王

㉒ 輪王比二初利

なれども、これを切利天王に比すれば、また醜悪にして、相諭えることを得ざる

こと、万億倍なり。②⑧もし天帝を、第六天王に比すれば、百千億倍にして、相類

せず。②⑨もし第六天王を、無量寿佛国の菩薩・声聞に比するに、光顔容色、相

及ばざること、百千万億不可計倍なり。

②⑩佛、阿難に告げたまわく。無量寿国の、その諸もろの天人、衣服・飲食・華

香・瓔珞・繪蓋・幢幡・微妙の音声・所居の舍宅・宮殿楼閣、その形色に称つ

て、高下大小あり。②⑪あるいは一宝二宝乃至無量の衆宝、意の所欲に随い、念に応

じてすなわち至る。②⑫また衆宝の妙衣をもつて、徧くその地に布けり。一切の天

人、これを踐んで行く。②⑬無量の宝網、佛土に弥覆せり。皆金縷真珠、百千の雜

宝、奇妙珍異なるをもつて、莊嚴交飾せり。四面に周帛して、垂るるに宝鈴

をもつてす。②⑭光色晃耀にして、尽く嚴麗を極めたり。②⑮自然の徳風、徐く起つて

微動するに、その風調和にして、寒からず、暑からず。②⑯温涼柔軟にして、遅

からず、疾からず。②⑰諸もろの羅網および衆もろの宝樹を吹いて、無量の微妙の法

音を演発し、②⑱万種の温雅の徳香を流布す。その聞くことある者は、塵勞垢習、自

然に起らず。②⑲風、その身に触るるに、皆、快樂を得。譬えば比丘の、滅尽三昧を

得るがごとし。

②⑧ 切利比二他化一

②⑨ 他化比二聖衆一

②⑩ 依報勝(六)、資具称身

②⑪ 衆宝随レ心

②⑫ 宝衣布レ地

②⑬ 宝網羅覆

②⑭ 徳風吹鼓(二)、総標徳

②⑯ 別列レ徳(四)、風体調和

②⑰ 出レ声説法

②⑱ 触レ身生レ楽

②④ また風、華を吹き散じて、佛土に徧満す。色の次第に随つて、雜乱せず。柔軟光沢にして、馨香芬烈せり。足、その上を履むに、陥下すること四寸、足を擧げおわるに随つて、還復すること故のごとし。華用いおわれば、地すなわち開裂す。次をもつて化没して、清淨にして、遺りなし。その時節に随つて、風華を吹き散ず。かくのごとくすること六返なり。また衆宝の蓮華、世界に周満せり。

②⑤ 一 一の宝華に、百千億の葉あり。その華の光明、無量種の色あり。青色には青光あり。白色には白光あり。玄黄朱紫の光色もまたしかなり。暉曄煥爛にして、明曜なること日月のごとし。一一の華の中より、三十六百千億の光を出だす。一一の光の中より、三十六百千億の佛を出だす。身色紫金にして、相好殊特なり。一一の諸佛また百千の光明を放つて、普く十方の為に、微妙の法を説きたまう。かくのごとときの諸佛、各おの無量の衆生を、佛の正道に安立せしめたまう。

②④ 吹レ革満レ国

②④ 明ニ華満ニ

②⑤ 明ニ多葉ニ

②⑤ 明ニ多光ニ

②④ 明ニ出佛ニ四、光出多

佛一

②⑤ 多佛放レ光

②⑤ 各説ニ妙法ニ

②⑦ 各利ニ衆生ニ

佛説無量壽經 卷下

曹魏天竺三藏康僧鎧訳

① 佛、阿難に告げたまわく。それ衆生あつて、かの国に生ずる者は、皆悉く正定の聚に住す。所以は何ん。かの佛国の中には、諸もろの邪聚および不定聚なし。十方恒沙の諸佛如来、皆共に無量壽佛の威神功德の不可思議なることを讚歎したまう。② あらゆる衆生、その名号を聞きて、信心歡喜して、乃至一念、至心に廻向して、かの国に生ぜん願すれば、すなわち往生を得て、不退転に住す。ただ五逆と正法を誹謗するをを除く。

④ 佛、阿難に告げたまわく。十方世界の諸天人民、それ至心あつて、かの国に生ぜん願するに、凡そ三輩あり。その上輩の者は、家を捨てて、沙門となり、菩提心を發し、一向に専ら無量壽佛を念じ、諸もろの功德を修して、かの国に生ぜん願す。⑦ これ等の衆生、壽終の時に臨んで、無量壽佛、諸もろの大衆と与に、その人の前に現じたまう。⑧ すなわちかの佛に随つて、その

① 明三所撰(一)、明悲化

(二)、明三凡夫往生(三)、総
舉三正定聚益

② 別明三念佛利益(一)、諸
佛讚嘆

③ 念佛往生

④ 總弁三往生因縁(一)、総
標

⑤ 別説(三)、上輩(三)、奉

⑥ 弁四、明三生因

⑦ 明三生縁

⑧ 明三往生

くに往生し、すなわち七宝華の中において、自然に化生す。不退転に住して、智慧勇猛、神通自在なり。この故に阿難、それ衆生あつて、今世において、無量寿佛を見たてまつらんと欲さば、まさに無上菩提の心を発して、功德を修行してかの国に生ぜん願ずべし。

① 佛、阿難に語げたまわく、その中輩の者は、十方世界の諸天人民、それ至心あつて、かの国に生ぜん願ずば、行じて沙門となり、大いに功德を修するこゝと能わずといえども、まさに無上菩提の心を発して、一向に専ら無量寿佛を念ずべし。多少に善を修して、齋戒を奉持し、塔像を起立し、沙門に飯食せしめ、繪を懸け燈を然やし、華を散らし香を焼き、これをもつて廻向して、かの国に生ぜん願ずれば、その人、終りに臨んで、無量寿佛、その身を化現したまう。光明相好、具に真佛のごとし。諸もろの大衆と与に、その人の前に現じたまう。すなわち化佛に随つて、その国に往生す。不退転に住して、功德智慧、次いで上輩の者のごとし。

② 佛、阿難に告げたまわく。その下輩の者は、十方世界の諸天人民、それ至心あつて、かの国に生ぜん願ずば、行じて沙門となり、大いに功德を修するこゝと能わずといえども、まさに無上菩提の心を発して、一向に意を専らにして、乃至十念、無量寿

⑨ 生後、益

⑩ 勸

⑪ 中輩(一)、拳

⑫ 弁四、明三生因(二)、簡二

去上輩一

⑬ 正明二修因一

⑭ 明三生縁一

⑮ 明三往生一

⑯ 生後、益

⑰ 下輩(一)、拳

⑱ 弁四、明三正因(二)、簡二

去中輩一

⑲ 正明二修因一

佛を念じて、その国に生ぜんと願はずべし。もし深法を聞きて、歡喜信樂して、

疑惑を生ぜず、乃至一念、かの佛を念じて、至誠心をもって、その国に生ぜん

と願すれば、この人臨終に、夢のごとくにかの佛を見たてまつりて、また往生

を得。功德智慧、次いで中輩の者のごとし。

佛、阿難に告げたまわく。無量寿佛の威神極まりなし。十方世界の無量無辺

不可思議の諸佛如来、称歎したまわずということなし。かの東方恒沙の佛国に

おいて、無量無数の諸もろの菩薩衆、皆悉く無量寿佛の所に往詣して、お

よび諸もろの菩薩声聞大衆を、恭敬し供養して、經法を聴受し、道化を宣

布す。南西北方四維上下も、またかくのごとし。その時世尊、頌を説いていわ

28 東方の諸佛の国

かの土の菩薩衆、

29 南西北四維

かの土の菩薩衆、

30 一切の諸もろの菩薩

その数恒沙のごとし。

往きて無量覺に觀えたてまつる。

上下もまたしかなり。

往きて無量覺に觀えたてまつる。

各おの天の妙華と

20 明二生緣一

21 明二往生一

22 生後、益

23 門二聖人往生一、長行。

略、弁二、諸佛、讚嘆一、釈迦讚嘆

24 余佛、讚嘆

25 大聖往詣二、挙二東方一

26 類二余方一

27 重頌、広説二、經家序列

28 世尊正頌二、大聖、往詣
三、明二往詣一、東方、往

29 觀
余方、往觀

30 明二供養一、見佛供養
二、外事供養

宝香と無価の衣とを齎つて

威然として天樂を奏し

最勝尊を歌歎して

神通と慧とを究達して

功德蔵を具足して

慧日、世間を照らして

恭敬して繞ること三匝して

かの敵浄の土を見るに

因つて無上心を發す。

時に應じて無量尊、

口より無數の光を出だして

光を廻らして身を圍繞すること

一切の天人衆、

大土觀世音、

佛にもうさく。何に縁つてか笑み

たまう。

無量覺を供養す。

和雅の音を暢發し、

無量覺を供養す。

深法門に遊入す。

妙智、等倫なし。

生死の雲を消除したまう。

無上尊を稽首したてまつる。

微妙にして思議し難し。

願わくは我が国もまたしかならんと。

容を動かして欣笑を發し、

徧く十方の国を照らしたまう。

三匝して頂より入る。

踊躍して皆歡喜す。

服を整えて稽首して問いたてまつる。

しかり願わくは意を説きたまえ。

しかり願わくは意を説きたまえ。

③① 内事供養(一)、口嘆供養

③② 身敬供養

③③ 見レ土願求

③④ 明三聽法(一)、彌陀現身

相(一)、正現レ相

③⑤ 衆歡喜

③⑥ 觀音佐問

③⑦ 梵声はなおいし雷震のごとく

まさに菩薩に記を授くべし。

③⑧ 十方より来れる正士

厳浄の土を志求す。

③⑨ 一切の法は

諸もろの妙願を満足して

④⑩ 法は電と影のごとしと知って

諸もろの功德の本を具するをもつて

④① 諸法の性は

専ら淨佛土を求む。

④② 諸佛、菩薩に告げて

法を聞きて樂受して行じて

④③ かの厳浄の国に至らば

④④ 必ず無量尊において

その佛の本願の力、

皆悉くかの国に到って

八音妙響を暢べたまう。

今説かん。仁諦かに聴け。

吾れ悉くかの願を知れり。

決を受けてまさに作佛すべし。

なおいし夢と幻と響のごとしと覺了して、

必ずかくのごときの刹を成ぜん。

菩薩の道を究竟す。

決を受けてまさに作佛すべし。

一切空無我なりと通達して、

必ずかくのごときの刹を成ぜん。

安養の佛に觀えしむ。

疾く清浄の処を得よ。

すなわち速やかに神通を得ん。

記を受けて等覺を成ずべし。

名を聞きて往生せんと欲すれば、

自ずから不退転に致る。

③⑦ 彌陀具答(一)、勸聽

③⑧ 正答(四)、拳三願心二記二成佛一

③⑨ 拳三智願三記二成土

④⑩ 拳三智行二記二成佛一

④① 拳三智願二記二成土

④② 諸佛讚嘆(一)、余佛諸嘆(二)、勸二往觀一

④③ 勸二觀益(二)、神通益

④④ 受記益

④⑤ 不退益

④6 菩薩、至願を興すらく。

普く一切を度し、

④7 億の如来に奉事するに

恭敬し歎喜して去つて

④8 もし人、善本なければ

清浄にして戒を有てる者

④9 かつてさらに世尊を見たてまつる

もの

⑤0 謙敬して聞きて奉行し

⑤1 憍慢と弊と懈怠とは

⑤2 宿世に諸佛を見たてまつるもの

⑤3 声聞あるいは菩薩

譬えば生まれより盲たるもの

如来の智慧海は

⑤4 二乗の測る所にあらず。

たとい一切の人

願わくは己が国も異なることなからん。

名、頭れて十方に達らんと念ず。

飛化して諸刹に徧じ、

④7 還つて安養国に到る。

この経を聞くことを得ず。

すなわち正法を聞くことを獲。

すなわち能くこの事を信ず。

踊躍して大いに歎喜す。

もつてこの法を信じ難し。

⑤1 樂つてかくのごときの教を聴く。

能く聖心を究むることなし。

⑤2 行つて人を開導せんと欲するがごとし。

深広にして涯底なし。

ただ佛のみ独り明了なり。

具足して皆道を得、

④6 起願益

④7 供佛益

④8 釈迦讚嘆(三)、聞信甚難

(四)、無善不聞

④9 有善獲聞、宿善能信

⑤1 惡人難信

⑤2 宿善樂聽

⑤3 佛智難思(三)、三重不測

⑤4 一切不知

淨慧あつて本空を知り

力を窮め講説を極めて

佛慧は辺際なし。

壽命甚だ得難く

人、信慧あること難し。

法を聞きて能く忘れず、

すなわち我が善き親友なり。

たとい世界に満たらん火をも

会ずまさに佛道を成じて

億劫に佛智を思わんに、

寿を尽くすともなお知らじ。

かくのごとく清浄なることを致す。

佛世また値い難し。

もし聞かば精進に求めよ。

見ては敬い、得ては大いに慶ぶべし。

この故にまさに意を発すべし。

必ず過ぎて要す法を聞け。

広く生死の流れを濟うべし。

佛、阿難に告げたまわく。かの国の菩薩、皆まさに一生補処を究竟すべし。

その本願あつて衆生の為の故に、弘誓の功德をもつて、自ら莊嚴して、普く

一切衆生を度脱せんと欲せんをば除く。阿難。かの佛国の中の諸もろの声聞衆

は、身光一尋なり。菩薩の光明は、百由旬を照らす。二菩薩あり、最尊第一な

り。威神の光明、普く三千大千世界を照らす。阿難、佛にもうさく。かの二菩

薩、その号、云何ぞ。佛ののたまわく。一をば觀世音と名づけ、二をば大勢至と

⑤⑤ 結二嘆難思一

⑤⑥ 挙レ難勸レ聞(三)、勸二精進一

⑤⑦ 勸二発心一

⑤⑧ 勸二聞法一

⑤⑨ 明三厭欣境界(二)、挙レ楽令レ欣(一)、彼土樂事(八)、究竟補処、

⑥① 光明殊妙(三)、総明二炎不同一

⑥② 別明二土名一

名づく。この二菩薩、この国土において、菩薩の行を修し、命終転化して、

⑥2 明三士往生

かの佛国に生ず。阿難。それ衆生あつて、かの国に生ずる者は、皆悉く三十

⑥3 身相具足

二相を具足す。智慧成満して、深く諸法を入り、要妙を究暢し、神通無礙に

⑥4 智慧殊勝(四)、通三達教

して、諸根明利なり。その鈍根のものは、二忍を成就し、その利根のものは、不可

法一

計の無生法忍を得。またかの菩薩、乃至成佛まで、悪趣に更らず。神通自在に

⑥5 神通無碍

して、常に宿命を識る。他方の五濁悪世に生じて、示現してかれに同ずるこ

⑥6 六根明利

と、我が国のごとくならんをば除く。

⑥7 得忍不同

佛、阿難に告げたまわく。かの国の菩薩、佛の威神を承けて一食の頃に、十方

⑥8 永離二惡趣一

無量の世界に往詣して、諸佛世尊を恭敬し供養す。心の所念に随つて、華香・

⑦1 供具隨心

伎楽・繪畫・幢幡、無数無量の供養の具、自然に化生して、念に應じてすなわ

ち至る。珍妙殊特にして、世の所有にあらず。すなわちもつて諸佛菩薩、声聞

⑦1 供物神変

大衆に奉散す。虚空の中に在つて、化して華蓋と成る。光色昱燦として、香氣

普く熏ず。その華、周円、四百里なる者あり。かくのごとく転倍して、すなわ

⑦2 諸聖歌嘆

ち三千大千世界を覆う。その前後に随つて、次をもつて化没す。その諸もろの菩

薩、僉然として欣悦す。虚空の中において、共に天楽を奏す。微妙の音をもつ

⑦3 聞法歡喜

て、佛徳を歌歎し、經法を聴受して、歡喜すること無量なり。佛を供養しお

⑦4 明三掃本國一

わって、いまだ食せざる前に、忽然として輕挙して、その本国に還る。

①5 佛、阿難に語げたまわく。無量寿佛、諸もろの声聞菩薩大衆の爲に、法を

班宣したまう時、すべて、悉く七宝の講堂に集会して、広く道教を宣べ、妙

法を演暢したまうに、歡喜し、心解し、得道せずということなし。即時に四方

より、自然に風起つて、普く宝樹を吹いて、五音の声を出だし、無量の妙華を

雨らして、風に随つて周徧す。自然の供養、かくのごとく絶えず。①6 一切の諸天、

皆天上百千の華香万種の伎楽を齎つて、その佛および諸もろの菩薩声聞大衆

を供養す。普く華香を散じ、諸もろの音楽を奏し、前後に来往して、更わるがわ

る相開避す。①7 その時に當つて、熙怡快樂、勝えていふべからず。

佛、阿難に語げたまわく。かの佛国に生ずる諸もろの菩薩等、講説すべき所

あれば、常に正法を宣ふ。智慧に随順して、違ふことなく失まることなし。こ

の国土のあらゆる万物において、我所の心なく、染著の心なし。①8 去來進止、情

に係る所なし。意に随つて自在にして、適莫する所なし。彼もなく我もな

く、競うことなく訟うことなし。①9 諸もろの衆生において、大慈悲・饒益の心を

得たり。柔軟に調伏して、忿恨の心なし。離蓋清淨にして、厭怠の心なし。

等心・勝心・深心・定心・愛法樂法喜法の心のみあり。①7 諸もろの煩惱を滅し

①5 聞法不絕(三)、聞法得益

①6 供養如來(三)、風起音供

①7 風吹華供

①8 諸天供養

①9 快樂無極

②0 行徳円満(二)、別嘆(七)、

行修離過(三)、化行離過

②1 自行無失(二)、撰二对治一

(六)、捨行

②2 戒行

②3 忍行

②4 精進

②5 禪行

②6 惠行

②7 離諸過一

て、悪趣の心を離れ、一切菩薩の所行を究竟せり。無量の功德を具足し成就す。深禅定と諸もろの通と明と慧とを得て、志を七覚に遊ばしめ、心を佛法に修す。肉眼清徹にして、分了ならずということなく、天眼通達して、無量無限なり。法眼觀察して、諸道を究竟す。慧眼、真を見て、能く彼岸に度る。佛眼具足して、法性を覚了す。無礙智をもつて、人のために演説す。等しく三界は空なり無所有なりと観じて、佛法を志求し、諸もろの弁才を具して、衆生の煩惱の患いを除滅す。如来より生じて、法の如如を解し、善く習滅音声の方便を知つて、世語を欣わず、正論に樂在す。諸もろの善本を修して、志佛道を崇む。一切の法は、皆悉く寂滅なりと知つて、生身と煩惱と二余と俱に尽くせり。甚深の法を聞きて、心に疑懼せず。常に能く修行す。その大悲は、深遠微妙にして、覆載せずということなし。一乗を究竟して、彼岸に至る。疑網を決断して、慧、心に由つて出づ。佛の教法において、該羅して外なし。智慧は大海のごとく、三昧は山王のごとし。慧光明浄にして、日月に超踰せり。清白の法、具足し円満すること、なおし雪山のごとし。諸もろの功德を照らすこと、等一にして浄きが故に。なおし大地のごとし。淨穢好悪、異心なきが故に。なおし浄水のごとし。塵勞・諸もろの垢染を洗除するが故に。なおし火王のごと

88 総結三行修

89 成徳同満(一)、総標

90 別説(一)、自利(一)、自分

徳

91 勝進徳

92 利他

93 修行具足(一)、明修行一

(一)、自利行、

94 利他行

95 明修行成(一)、自行成四、

自分解

96 自分行

97 勝進解

98 勝進行

99 利他成

100 成徳殊勝(一)、明摂善勝

(一)、智断対

101 理教対

102 定慧対

103 明三離過勝(一)、法説

104 譬説(一)、自利

し。一切の煩惱の薪を焼滅するが故に。なおし大風のごとし。諸もろの世界を行くに、障礙なきが故に。なおし虚空のごとし。一切の有において、所著なきが故に。なおし蓮華のごとし。諸もろの世間において、汗染なきが故に。なおし大乘のごとし。群萌を運載して、生死を出すが故に。なおし重雲のごとし。大法雷を震つて、未覚を覚するが故に。なおし大雨のごとし。甘露の法を雨らして、衆生を潤すが故に。金剛山のごとし。衆魔外道も、動ずること能わざるが故に。梵天王のごとし。諸もろの善法において、最上首なるが故に。尼拘類樹のごとし。普く一切を覆うが故に。優曇鉢華のごとし。希有にして遇い難きが故に。金翅鳥のごとし。外道を威伏するが故に。衆もろの遊禽のごとし。藏積する所なきが故に。なおし牛王のごとし。能く勝つものなきが故に。なおし象王のごとし。善く調伏するが故に。師子王のごとし。畏るる所なきが故に。曠きこと虚空のごとし。大慈等しきが故に。嫉心を摧滅して、勝れたるを忌まざるが故に。専ら法を衆求して、心に厭足なし。常に広説を欲して、志疲倦なし。法鼓を撃ち、法幢を建て、慧日を曜かし、癡闇を除き、六和敬を修す。常に法施を行じ、志勇精進にして、心退弱せず。世の燈明となつて、最勝の福田なり。常に導師となつて、等しくして憎愛なし。ただ正道を樂つて、余の欣戚な

⑩ 利他

⑪ 行修増進(一)、自分行修

(一)、方便(一)、利他方便

⑫ 自利方便

⑬ 正行(一)、利他正行

⑭ 自利正行

⑮ 勝進行修(三)、明修始

(一)、利他

⑯ 自利

⑰ 明修次(一)、利他

⑱ 自利

し。諸もろの欲刺を抜いて、もつて群生を安んず。功慧殊勝にして、尊敬せられずといふことなし。三垢の障りを滅して、諸もろの神通に遊ぶ。因力・縁力・^{①⑦}意力・願力・方便の力・常力・善力・定力・慧力・多聞の力・施戒忍辱精進禪定智慧の力・正念正観諸もろの通明の力・如法に諸もろの衆生を調伏する力、かくのごとき等の力、一切具足せり。身色相好、功德弁才、具足し莊嚴して、与に等しき者なし。無量の諸佛を恭敬し供養して、常に諸佛に共に称歎せらる。菩薩の諸波羅蜜を究竟し、空相無願三昧と不生不滅との、諸もろの三昧門を修して、声聞縁覚の地を遠離せり。阿難。かの諸もろの菩薩は、かくのごとき無量の功德を成就せり。我れただ汝が為に、略してこれを説くのみ。もし広く説かば、^{①⑧}一百万劫にも窮尽すること能わじ。

佛、彌勒菩薩・諸天人等に告げたまわく。無量寿国の声聞・菩薩の功德智慧、称説すべからず。またその国土、微妙安樂にして、清淨なることかくのごとし。^{①⑨}何ぞ力めて善をなさざる。道を念ずれば自然なり。著にして上下なし。洞達して辺際なし。よろしく各々の勤精進して、努力めて自らこれを求むべし。必ず超絶し去つて、安養國に往生することを得れば、横に五惡趣を截り、惡趣自然に閉じ、道に昇ること窮極なし。^{①⑩}往き易くして人なし。その國、逆違せ

①④ 明修成(一)、利他

①⑤ 自力

①⑥ 諸力具足(一)、別説(一)、

①⑦ 自力(七)、起修所依

①⑧ 起修方便

①⑨ 加行正修

①⑩ 修心成就

①⑪ 起行之解

①⑫ 所起之行

①⑬ 依行成徳

①⑭ 利他

①⑮ 総結

①⑯ 総嘆頌勝四、自徳最勝

①⑰ 為佛共嘆

①⑱ 究竟大乘

①⑲ 超出二乘

①⑳ 総結

①㉑ 勸三人往生(一)、牒三人

①㉒ 土勝(一)、牒入勝一

①㉓ 牒土勝一

①㉔ 正勸往生(二)、正勸

①㉕ 傷嘆

ず。自然の牽く所なり。何ぞ世事を棄てて、勤行して道徳を求めざる。極長生を獲て、寿樂極まりあることなかるべし。しかるに世人薄俗にして、共に不急の事を誑う。この劇悪極苦の中において、勤身營務して、もつて自ら給済す。尊となく卑となく、貧となく富となく、少長男女共に錢財を憂うることに、有無同じくしかり。憂思まさに等し。屏営として愁苦して、念いを累ね慮りを積む。心に走使せられて、安き時あることなし。田あれば田を憂う、宅あれば宅を憂う。牛馬・六畜・奴婢・錢財・衣食・什物また共にこれを憂う。思いを重ね息きを累ねて、憂念愁怖す。横に非常の水火・盜賊・怨家・債主に焚漂し劫奪せられて、消散し磨滅す。憂毒忪忪として、解くる時あることなし。憤りを心中に結んで、憂悩を離れず。心堅く意固くして、まさに縦捨することなし。あるいは摧碎に坐つて、身亡び命終わりぬれば、これを棄捐して去る。誰の随う者もなし。尊貴豪富もまたこの思えあり。憂懼万端にして、勤苦することかくのごとし。衆もろの寒熱を結んで、痛と共に居す。貧窮下劣は、困乏にして常になし。田なければまた憂えて、田あるんことを欲し、宅なければまた憂えて、宅あるんことを欲す。牛馬・六畜・奴婢・錢財・衣食・什物なければ、また憂えてこれあるんことを欲す。適たま一あればまた一を少き、これあればこ

134 重勸

135 孝^レ苦令^レ厭^四、孝^二煩惱過^三、明^二貪欲過^二、

総標

136 別説(三)、通明^二世人貪^二(二)、求財苦

137 守護苦

138 散失苦(二)、失財

139 失身

140 別明^二富貴貪^二(二)指同^二向^レ苦^一

141 結^レ有^二憂苦^一

142 別明^二貧賤貪^二(二)、明^二現苦^二(二)、求財苦^五、無中生^レ苦

143 少中生^レ苦

れを少く。齊等あらんことを思ふ⁽¹⁴⁴⁾。適たま欲して具にあれば、すなわちまた糜散す。かくのごとく憂苦して、まさにまた求索すべし。時に得ること能わず。思想して益なし。身心俱に勞して、坐起安からず。憂念相隨つて、勤苦することかくのごとし。また衆もろの寒熱を結んで、痛と共に居す。ある時はこれに坐りて、身を終え命を夭す⁽¹⁴⁶⁾。肯て善をなし、道を行じ徳に進まず。寿終り身死して、まさに独り遠く去るべし。趣向する所あれども、善惡の道、能く知る者なし。世間の人民・父子・兄弟・夫婦家室・中外の親屬、まさに相敬愛して、相憎嫉することなく、有無相通つて、貪惜を得ることなく、言色常に和して、相違戻することなかるべし。ある時は心諍つて、恚怒する所あり、今世の恨みの意、微しく相憎嫉すれば、後世に転劇だしくして、大怨と成るに至る。所以は何ん。世間の事、更に相害害す。即時に、急に相破すべからずといえども、しかも毒を含み怒りを畜え、憤りを精神に結んで、自然に剋識して、相離るることを得ず。皆まさに対生して、更に相報復すべし⁽¹⁵⁰⁾。人、世間愛欲の中に在つて、独り生じ独り死し、独り去り独り来る。行を当て苦樂の地に至り趣く。自らこれを当く。代る者あることなし。善惡變化し、殃福、処を異にし、あらかじめ敵に待つ。まさに独り趣入すべし。遠く他所に到りぬれば、能く見る者なし。

(144) 得中生苦

(145) 求不得苦

(146) 綵結憂苦

(147) 失身苦

(148) 明三当苦一

(149) 明三嗔恚過(三)、以理教

勸

(150) 広明三嗔過(三)、未来怨

害過

(151) 未来惡道過

善悪ぜんあく自然じぜんにして、行ぎやうを追おつて生しょうずる所ところなり。¹⁵² 窃せつ窃せつ冥みやう冥みやうとして、別べつ離りするこ
と久く長じやうなり。道どう路ろ同どうじからざれば、会え見けん期ごなし。甚はなはだ難かたく甚はなはだ難かたし。また相
値あうことを得えんや。¹⁵³ 何なんぞ衆しゆじ事を棄すてて、各おのの強ごう健けんの時ときに曼まんで、努つと力りめて善ぜんを
勤ごん修しゆし、精しやう進じんに度ど世せを願がんげざる。極ごく長じやう生しょうを得うべし。如い何かぞ道どうを求もとめざる。い
ずくんぞ待まつべき所ところぞ。何なんの楽たのしみをか欲ほつするや。かかくのごとき世せ人にん、善ぜんを作な
して善ぜんを得え、道どうを為なして道どうを得うることを信しんぜず。人ひと死ししてさらに生しょうじ、恵え施せして
福ふくを得うることを信しんぜず。善ぜん悪あくの事じ、都すべてこれを信しんぜず。これを然しからずと謂おもうて、
ついに是ぜすることあることなし。¹⁵⁴ だだこれに坐まるが故ゆゑに、かかつ自みづからこれを見みる。
¹⁵⁵ さらに相あい瞻せん視じして、先ぜん後ご同どうじく然しかり。転うた相たい承じやう受じゆするに、父ちち、教きやう令りやうを餘のこす。先
人にん祖そ父ぶ、素もとより善ぜんを為なさず、道どう徳とくを識しらず、身み愚おろかに神たま闍いく、心こころ塞ふさがり意こころ閉
じて、死し生しょうの趣しゆ・善ぜん悪あくの道どう、自みづから見みること能あたわず。語かたる者ものあることなし。吉きつ凶
禍か福ふく、競きそつて各おのの作おこれども、一いちとして怪あやしむことなし。¹⁵⁷ 生しょう死じの常つねの道どう、転うた相たい相
嗣しり立りゅうす。あるいは父ちち、子こを哭なくし、あるいは子こ、父ちちを哭なくす。兄きやう弟たい夫ふ婦ふ、さらに相
哭あひ泣なす。顛てん倒たう上じやう下げ、無む常じやうの根こん本ぽんなり。皆みなままさに過すぎ去さるべし、常つねに保たもつべから
ず。¹⁵⁸ 教きやう語ご開かい導どうすれども、これを信しんずる者ものは少すくなし。ここをもつて生しょう死じの流る転てん、
休くし止しあることなし。¹⁵⁹ かかくのごときのひと、矇む冥みやう抵たい突とつして、經きやう法ぽうを信しんぜず。心こころに遠

¹⁵² 別離難會過

¹⁵³ 結勸二修捨一

¹⁵⁴ 明二愚痴過一(一)、明二愚

痴一(一)、明二自無信一(一)、
別説

¹⁵⁵ 総結

¹⁵⁶ 明レ受二他語一

¹⁵⁷ 明二過失二四、明二自他
相哭一(一)、正明二相哭一

¹⁵⁸ 明二難二開曉一

¹⁵⁹ 明二造惡受苦一(一)、造惡

慮なくして、各おの快意せんと欲す。愛欲に癡惑せられて、道徳に達らず。瞋怒に迷没して、財色を貪狼す。これに坐つて道を得ず。まさに悪趣の苦に更えて、生死窮まりやむことなかるべし。哀れなるかな、甚だ傷むべし。ある時は室家・父子・兄弟・夫婦、一りは死し一りは生じて、さらに相哀愍し、恩愛思慕して、憂念結縛し、心意痛著して、迭いに相顧恋す。日を窮め歳をおわつて、解けやむことあることなし。道徳を教語すれども、心開明せず。恩好を思想して、情欲を離れず。昏瞶閉塞して、愚惑に覆わらる。深く思い、熟つら計つて、心自ら端正にして、專精に道を行じ、世事を決断すること能わず。便旋して竟りに至る。年寿、終り尽きれども、道を得ること能わず。奈何ともすべきことなし。総猥慣擾して、皆愛欲を貪ず。道に惑える者に衆く、これを悟る者は寡し。世間恩怨として、慘頼すべきことなし。尊卑・上下・貧富・貴賤、勤苦恩務して、各おの殺毒を懐く。悪氣竊冥にして、みだりに事を興さんとす。天地に達逆し、人心に従わず。自然の非悪、まず随つてこれに与す。恣に所為を聴して、その罪の極まりを待つ。その寿いまだ尽きざるに、たちまちこれを奪つて、悪道に下とし入れて、累世に勤苦せしむ。その中に展転して、数千億劫、出期あることなし。痛みいふべからず。甚だ哀愍すべし。

160 受苦

161 愍傷

162 明親戚相憶(三)、正明二相恋一

163 明不修善

164 明不得道

165 明造惡受苦(三)、造惡(二)、起貪追求

166 起嗔殺害

167 受苦

168 愍傷

佛、彌勒菩薩・諸天人等に告げたまわく。我れ今汝に語る。世間の事、人、これをもつての故に、坐つて道を得ず。まさに熟つら思い計つて、衆惡を遠離し、その善き者を択んで、勤めてこれを行ずべし。愛欲榮華、常に保つべからず。皆まさに別離すべし。樂しむべき者なし。佛の在世に曼んで、まさに勤精進すべし。それ至心あつて、安樂國に生ぜんと願せん者は、智慧明達に、功德殊勝なることを得べし。心の所欲に随つて、經戒に虧負して、人の後に在ることを得ることなかれ。もし疑意あつて、經を解せずんば、具に佛に問うべし。まさに為にこれを説くべし。彌勒菩薩、長跪してもうしてもうさく。佛は威神尊重にして、所説快善なり。佛の經語を聴きたてまつりて、貫心にこれを思うに、世人、実にしかなり。佛ののたまふ所のごとし。今佛、慈愍をもつて、大道を顯示したまうに、耳目開明にして、長く度脱を得たり。佛の所説を聞ききたてまつりて、歡喜せずといふことなし。諸天・人民・蠕動の類も、皆慈恩を蒙つて、憂苦を解脱す。佛語の教誡、甚だ深く甚だ善し。智慧明見にして、八方上下、去來今の事、究暢したまわずといふことなし。今我れ、衆等、度脱を得ることを蒙る所以は、皆佛の前世に、道を求めたまひし時、謙苦せしが致す所なり。恩徳普く覆つて、福祿巍巍たり。光明徹照して、空に達するこ

169 勸三人修捨(四)、正勸二

修捨(二)、勸三修捨(三)、
勸断三前過一

170 捨二五欲過一

171 勸二人勸修一

172 勸三請問一

173 彌勒領解(二)、正明三領
解(四)、歎三佛所說一

174 領三佛慈化一

175 重嘆三佛說一

176 重領三佛恩(二)、拳三得
度由一

177 正出三由相(二)、明三佛
因一

178 明三佛果(三)、總舉

179 別說

と極まりなし。泥洹に開入し、教授典攬し、威制をもつて消化して、十方を感動せしめたまふこと、無窮無極なり。佛は法王たるをもつて、尊きこと衆聖に超えたまへり。普く一切天人の師となつて、心の所願に随つて、皆道を得せしめたまふ。今佛に値いたてまつることを得、また無量寿佛の声を聞きたてまつりて、歡喜せずといふことなく、心、開明することを得たり。

佛、彌勒菩薩に告げたまわく。汝が言、是なり。もし佛を恭敬することある者は、実に大善なり。天下久久にして、すなわちまた佛有す。今我れこの世において作佛して、經法を演説し、道教を宣布して、諸もろの疑網を断ち、愛欲の本を抜き、衆惡の源を杜ぐ。三界に遊歩して、拘礙する所なし。典攬の智慧は、衆道の要なり。綱維を執持して、昭然分明なり。五趣を開示し、未度の者を度し、生死・泥洹の道を決す。彌勒、まさに知るべし。汝、無数劫よりこのかた、菩薩の行を修して、衆生を度せんと欲すること、それすでに久遠なり。汝に従つて道を得、泥洹に至るもの、数を称るべからず。汝および十方の諸天・人民・一切の四衆、永劫より已來、五道に展転して、憂畏勤苦すること、具にいうべからず。乃至今世まで、生死絶えず。佛と相値うて、經法を聴受し、また無量寿佛を聞くことを得たり。快きかな、甚だ善し、吾れ爾を助けて喜ば

①⑧ 結嘆

①⑨ 歡喜自慶

①⑫ 重勸ニ修捨ニ(四)、嘆ニ上

領解ニ(三)、印ニ領ニ佛説ニ

①⑬ 嘆ニ領ニ佛恩ニ

①⑭ 孝ニ其佛益ニ(二)、明ニ佛世難値ニ

①⑮ 明ニ佛出佛益ニ(二)、総明ニ化益ニ

①⑯ 別明ニ化益ニ

①⑰ 嘆ニ其聞法ニ(三)、明ニ修行久ニ(三)、正明ニ行久ニ

①⑱ 明ニ所化多ニ

①⑲ 明ニ憂苦多ニ

①⑳ 明ニ今値佛ニ(二)、聞ニ余法ニ

①㉑ 聞ニ淨教ニ

①㉒ 明ニ佛正度ニ

しむ。汝、今また、自ら生死老病の痛苦を厭うべし。悪露不淨にして、樂しむべき者なし。よろしく自ら決断すべし。身を端し行を正しうして、益ます諸善を作し、己を修め体を潔くし、心垢を洗除し、言行忠信にして、表裏相応すべし。人、能く自ら度して、転相拯濟し、精明に求願して、善本を積累せば、一世の勤苦は、須臾の間なりといえども、後には無量寿佛の国に生じて、快樂極まりなし。長く道徳と合明し、永く生死の根本を抜き、また貪患癡、苦悩の患えなからん。寿、一劫百劫千万億劫ならんと欲すれば、自在に意に随つて、皆これを得べし。無為自然にして、泥洹の道に次げり。汝等よろしく各おの精進して、心の所願を求むべし。疑惑し中悔して、自ら過咎を為すことを得ることなかれ。かの辺地の、七宝の宮殿に生ずれば、五百歳の中に諸もの厄を受く。彌勒、佛にもうしてもうさく。佛の重誨を受けたり。專精に修学して、教えのごとく奉行して、敢えて疑うことあらじ。

佛、彌勒に告げたまわく。汝等能くこの世において、端心正意にして、衆惡を作さざるを、甚だ至徳とす。十方世界、最も倫匹なし。所以は何ん。諸佛国土の天人の類は、自然に善を作して、大いに惡を為さず。開化すべきこと易し。今我れこの世間において作佛して、五惡・五痛・五燒の中に処すること、最も劇苦

- 193 勸二其修行(一)、正勸二修行(二)、勸二捨過(二)、厭二痛苦
 194 捨二不淨二
 195 勸二修善二
 196 勸二利生二
 197 学二益勸二修(一)、明二修時短一
 198 明得益長(一)、正明二益長(四)、受樂長
 199 成徳長
 離過長
 得寿長
 200 明二益殊勝一
 201 勸二專修行一
 202 正勸二捨疑
 203 学二過勸二捨
 204 重復領解
 205 学二業苦過(二)、総弁(一)、嘆二向領解(二)、当相正嘆
 206 寄对、顯二勝
 207 明二顯勝由二
 208 顯二佛化意(二)、顯二自成佛一
 209 顯二化導、処二

なりとす。群生を教化して、五悪を捨てしめ、五痛を去らしめ、五焼を離れしめ、その意を降化して、五善を持して、その福德、度世・長寿・泥洹の道を獲得せしむ。佛ののたまわく。何等か五悪、何等か五痛、何等か五焼なる。何等か五悪を消化し、五善を持して、その福德・度世・長寿・泥洹の道を獲得す。

佛ののたまわく。その一悪とは、諸天・人民・蠕動の類、衆悪を為さんと欲す。皆しからずということなし。強き者は弱きを伏し、転相剋賊し、残害殺戮して、送いに相呑噬す。善を修することを知らず、惡逆無道なり。後に殃罰を受けて、自然に趣向す。神明記識して、犯せる者を赦さず。故に貧窮・下賤・乞匄・孤独・聾盲瘖瘂・愚癡・弊惡なるものあり。佞・狂・不逮の属あるに至る。また尊貴・豪富・高才・明達なるものあり。皆宿世の慈孝・修善・積徳の致す所に由る。世に、常の道の王法の牢獄あれども、肯て畏れ愼まず。惡を為り罪に入りて、その殃罰を受く。解脱を求め望めども、免れ出づることを得難し。世間に、この目前に見る事あり。寿終わつて後世に、尤だ深く尤だ劇し。その幽冥に入りて、生を転じて身を受く。譬へば王法の痛苦、極刑のごとし。故に自然の三塗、無量の苦惱あり。その身を転質し、形を改め道を易う。受く

212 正顯化意(一)、明三所離一

213 明三所得一

214 別説(一)、佛自問(一)、問三所離一

215 問三所得一

216 佛自答(四)、殺生惡(一)、

明レ惡(四)、総標

217 別説(三)、明レ惡(三)、明二造惡類一

218 正明二造惡一

219 明三造惡過(一)、正明二過失一

220 明レ痛

221 明レ痛

222 明レ燒

る所の寿命、あるいは長く、あるいは短し。鬼神精識、自然にこれに趣く。ま
 さに独り値い向かい、相従つて共に生ずべし。更相に報復して、絶えやむこと
 あることなし。殃悪いまだ尽きざれば、相離るることを得ず。その中に展転し
 て、出期あることなし。解脱を得難し。痛み、いうべからず。天地の間に、自
 然にこれあり。即時に、卒暴に応至せずといえども、善悪の道、会ずまさにこれ
 に帰すべし。これを一大悪・一痛・一焼とす。勤苦することかくのごとし。譬え
 ば大火の、人身を焚焼するがごとし。人、能く中において、一心に意を制し、
 身を端し行を正して、独り諸善を作して、衆悪をなさざれば、身、独り度脱し
 て、その福德・度世・上天・泥洹の道を獲。これを一大善とす。

佛ののたまわく。その二悪とは、世間の人民・父子・兄弟・室家・夫婦、す
 べて義理なく、法度に順ぜず。奢姪・僞・縦にして、各々の快意せんと欲す。心
 に任せて自ら恣にし、更相に欺惑し、心口、各々の異にして、言念、実なし。
 佞諂・ふ忠にして、言を巧みにして諛い媚び、賢を嫉み善を誘して、怨枉に
 陥し入る。主上明らかならずして、臣下を任用す。臣下自在にして、機偽多端な
 り。踐度能行して、その形勢を知る。位にあって正しからざれば、それに欺
 かる。みだりに忠良を損じて、天心に当らず。臣はその君を欺き、子はその

- ②③ 総結
- ②④ 譬喩
- ②⑤ 明レ善(一)、弁(一)、翻二對
作惡一
- ②⑥ 翻對痛燒
- ②⑦ 結
- ②⑧ 偷盜惡(一)、明レ惡四、
繪標
- ②⑨ 別說(三)、明レ惡(三)、明二
造惡人一
- ②⑩ 正明二造惡(一)、明二無
善一
- ②⑪ 明二造惡(二)、明二盜所
為一
- ②⑫ 正明二劫盜

父を欺く。兄弟・夫婦・中外の知識、更相に欺誑す。各おの貪欲・瞋恚・愚癡を懷いて、自ら己を厚くせんと欲して、多くあらんことを欲貪す。尊卑・上下・心俱に同じくしかなり。家を破り身を亡ぼし、前後を顧みず。親属・内外、これに坐つて滅す。ある時は室家の知識、郷党市里の愚民・野人、転共に事に従う。更相に利害して、忿り成し、怨結ぶ。富有なれども慳惜して、肯て施与せず。宝を愛し重きを貪じて、心勞し、身苦しむ。かくのごとくして竟りに至つて、恃怙する所なし。独り来り独り去つて、一りも隨う者なし。善惡禍福、命を追つて生ずる所なり。あるいは楽処に在り。あるいは苦毒に入る。しかして後にすなわち悔ゆともまさにもまた何ぞ及ぶべき。世間の人民、心愚に智少なくて、善を見ては憎謗して、慕い及ばんことを思はず。ただ、惡を為さんと欲して、みだりに非法を作し、常に盜心を懷いて、他の利を恫望す。消散し糜尽して、また求索す。邪心正しからずして、人の色あらんことを懼る。あらかじめ思い計らず、事至つてすなわち悔ゆ。今世に現に王法の牢獄あり。罪に隨つて趣向して、その殃罰を受く。その前世に道徳を信ぜず、善本を修せざるに因つて、今また惡を為る。天神剋識して、その名籍を別つ。壽終り、神逝つて、惡道に下し入る。故に自然の三塗、無量の苦惱あり。その中に展転して、世

②⑧ 明二造惡、過一

②⑨ 明レ痛

②⑩ 明レ燒

累劫に、下期あることなし。解脱を得難し。痛み、いうべからず。これを二大
悪・二痛・二焼とす。勤苦することかくのごとし。譬えば大火の人身を焚焼する
がごとし。人、能く中において一心に意を制し、身を端し行を正して、独り諸
善を作して、衆悪をなさざれば、身独り度脱して、その福德・度世・上天・泥
洹の道を獲。これを二大善とす。

佛のたまわく。その三悪とは、世間の人民、相因つて寄生して、共に天地の
間に居す。短年寿命、能く幾何なることなし。上に賢明・長者・尊貴・豪富あ
り。下に貧窮・厮賤・佞劣・愚夫あり。中に不善の人あり。常に邪悪を懐けり。
ただ姪姪を念じて、煩い胸中に満つ。愛欲交乱して、坐起安からず。貪意守惜
して、ただ唐に得んことを欲す。細色を眇睽して、邪態、外に逸なり。自妻
をば厭憎して、私にみだりに入出し、家財を費損して、事、非法を為す。交ご
も聚會を結んで、師を興して相伐つ。攻劫殺戮して、強奪不道なり。悪心、外に
在つて、自ら業を修せず。盜竊、わづかに得れば、欲繫、事を成す。恐熱、迫懼
せしめて妻子に帰給す。恣心、快意して、身を極めて楽を作す。あるいは親属
において、尊卑を避けざるをもって、家室・中外、患えてこれを苦しむ。また王
法の禁令を畏れず。かくのごときの悪は、人鬼に著され、日月照見し、神明記

236 総結

237 譬喩

238 明善(一)、弁(一)、翻(一)対

作善一

239 翻(一)対痛焼一

240 結

241 邪姪悪(一)、明(一)悪(一)、

総標

242 別説(一)、明(一)悪(一)、明(一)

造悪人一

243 正明(一)造悪(一)

244 明(一)造悪(一)過(一)

245 明(一)痛

246 明(一)焼

識す。故に自然の三塗、無量の苦惱あり。その中に展転して、世世累劫に、出期あることなし。解脱を得難し。痛みいふべからず。これを三大悪・三痛・三焼とす。勤苦することかくのごとし。譬えば大火の、人身を焚焼するがごとし。人、能く中において、一心に意を制し、身を端し行を正しうして、独り諸善を作して、衆悪を為さざれば、身、独り度脱して、その福德・度世・上天・泥洹の道を得。これを三大善とす。

佛のたまわく。その四悪とは、世間の人民、善を修せんことを念ぜず。転相教令して、共に衆悪を為すに、兩舌・悪口・妄言・綺語す。讒賊、鬪乱して、善人を憎嫉し、賢明を敗壞し、傍において快喜して、二親に孝せず。師長を輕慢し、朋友に信なくして、誠実を得難し。尊貴自大にして、己、道ありと謂うて、横に威勢を行じて、人を侵易す。自ら知ること能わず。悪を為して恥じることなし。自ら強健なるをもつて、人の敬難を欲す。天地・神明・日月を畏れず。背て善を作さず。降化すべきこと難し。自らもつて偃僂して、常にしかるべしと謂えり。憂懼する所なくして、常に憍慢を懷けり。かくのごとき衆悪、天神記識す。その前世に、すこぶる福德を作すによつて、小善扶接し、營護してこれを助く。今世に悪を為して、福德尽滅す。諸もろの善鬼神、各おの共にこ

④⑦ 総結

④⑧ 譬喩

④⑨ 明レ善(一)、弁(一)、翻二對作惡一

④⑩ 翻二對痛燒一

④⑪ 結

④⑫ 妄語惡(一)、明レ惡(四)、

総標

④⑬ 別說(三)、明惡(三)、明二

造惡人一

④⑭ 正明二造惡一

④⑮ 明二造惡過一

④⑯ 明レ痛

れを離れて、身、独り空しく立って、また依る所なし。壽命終尽して、諸悪の帰する所なり。自然に迫促して、共に趣いてこれに頓る。またその名籍、神明に記在せり。殃咎牽引して、まさに往って趣向すべし。罪報、自然にして、捨離する從なし。ただ前行に得りて、火鑊に入る。身心、摧碎して、精神、痛苦す。この時に當って、悔ゆともまた何ぞ及ばん。天道自然にして、蹉跎することを得ず。故に自然の三塗、無量の苦惱あり。その中に展転して、世世累劫に、出期あることなし。解脱を得難し。痛みいうべからず。これを四大悪・四痛・四焼とす。勤苦することかくのごとし。譬えば大火の、人身を焚焼するがごとし。人、能く中において、一心に意を制し、身を端し行を正しうして、独り諸善を作して、衆悪を為さざれば、身、独り度脱して、その福德・度世・上天・泥洹の道を獲。これを四大善とす。

佛ののたまわく。その五惡とは、世間の人民、徒倚懈惰して、肯て善を作し、身を治め業を修せず。家室・眷属、飢寒・困苦す。父母、教誨すれば、目を瞞らして怒って膺う。言令不和にして、違戾反逆す。譬えば怨家のごとし。子ながらんには如かず。取与、節なくして、衆、共に患い厭う。恩に負き義に違いて、報償の心あることなし。貧窮困乏にして、また得ること能わず。辜較縦奪

②⑦ 明レ焼

②⑧ 総結

②⑨ 譬喩

②⑩ 明レ善(一)、弁(二)、翻二對

作惡一

②⑪ 翻二對痛焼一

結

②⑫ 飲酒惡(一)、明レ惡(四)、

総操

②⑬ 別說(三)、明惡(三)、明二

造惡人一

②⑭ 正明二造惡一

にして、放恣に遊散す。数しば唐に得るに申つて、もつて自ら賑給す。酒に耽り美を嗜んで、飲食度りなし。肆心に蕩逸し、魯扈抵突して、人情を識らず。強いて抑制せんことを欲す。人の善あるを見ては、憎嫉してこれを惡む。義なく、礼なくして、顧難する所なし。自らもつて職当して、諫曉すべからず。六親眷属の所資の有無、憂念すること能わず。父母の恩を惟わず。師友の義を存ぜず。心、常に惡を念じ、口、常に惡をいい、身、常に惡を行じて、かつて一善もなし。先聖・諸佛の經法を信ぜず。道を行じて、度世を得べきことを信ぜず。死して後、神明さらに生ずることを信ぜず。善を作して善を得、惡を為して惡を得ることを信ぜず。真人を殺し、衆僧を鬪乱せんと欲し、父母・兄弟・眷属を害せんと欲す。六親、憎惡して、それをして死せしめんことを願う。かくのごとき世人、心意俱にしかり。愚癡蒙昧にして、自ら智慧をもつてして、生の從來する所、死の趣向する所を知らず。不仁不順にして、天地に惡逆す。しかもその中において、希望儻倖して、長生を求めんと欲すれども、会ず当に死に帰すべし。慈心をもつて教誨して、それをして善を念ぜしめ、生死・善惡の趣、自然にこれあることを開示すれども、肯てこれを信ぜず。苦心に与に語れども、その人に益なし。心中閉塞して、意、開解せず。大命、まさに終らんとして、

悔懼、交ごも至る。あらかじめ善を修せず。窮まりに臨んでまさに悔ゆ。これを後に悔ゆとも、はた何ぞ及ばんや。天地の間に五道分明なり。恢廓窳窳、浩浩茫茫たり。善惡報応して、禍福相承く。身、自らこれを当く。誰も代る者なし。数の自然なるをもつて、その所行に応ず。殃咎、命を追つて、縦捨することを得ることなし。善人は善を行じて、楽より楽に入り、明より明に入る。悪人は悪を行じて、苦より苦に入り、冥より冥に入る。誰か能く知る者あらん。独り佛のみ知りたまうのみ。教語開示するに、信用する者は少なし。生死休まず。惡道絶えず。かくのごとき世人、具に尽くすべきこと難し。故に自然の三塗、無量の苦惱あり。その中に展転して、世世累劫に、出期あることなし。解脱を得難し。痛みいふべからず。これを五大願・五痛・五焼とす。勤苦することかくのごとし。譬えば大火の、人身を焚焼するがごとし。人、能く中において、一心に意を制し、身を端し念を正し、言行相副い、所作至誠にして、所語、語のごとく、心口転ぜず。独り諸善を作して、衆惡を為さざれば、身、独り度脱して、その福德・度世・上天・泥洹の道を得。これを五大善とす。

佛、彌勒に告げたまわく。吾れ汝等に語る。この世の五惡、勤苦することかくのごとし。五痛・五焼、展転して相生ず。ただ衆惡を作して、善本を修せず。皆

- 269 総結
- 270 譬喩
- 271 明善(一)、弁(一)、翻三對作惡一
- 272 翻三對痛焼一
- 273 結
- 274 重弁(一)、明惡(一)、総
- 275 明三相生一
- 276 別顯三相生(一)、明惡生三痛焼(一)、明造惡一
- 276 明起燒

悉く自然に、諸もろの悪趣に入る。あるいはその今世に、まず殃病を被つて、死を求むるに得ず、生を求むるに得ず。罪惡の招く所、示にして、衆、これを見る。身、死すれば行に随つて、三惡道に入る。苦毒無量にして、自ら相樵然せらる。その久しうして後に至つて、共に怨結を作す。小徴より起つて、ついに大惡となる。皆、財色を貪著して、施惠すること能わざるに由つてなり。癡欲に迫められ、心の思想に随つて、煩惱結縛して、解けやむことあることなし。己を厚くし利を諍つて、省録する所なし。富貴・榮華、時に當つて快意して、忍辱すること能わす。務めて善を修せず。威勢、幾ばくもなければ、随つてもつて磨滅す。身、勞苦を坐けて、久しうして後大いに劇し。天道施張して、自然に糺挙するに、綱紀羅網、上下相応す。榮榮松松として、まさにその中に入るべし。古今これあり。痛ましやかな、傷むべし。佛、彌勒に語げたまわく。世間かくのごとし。佛、皆これを哀れむ。威神力をもつて、衆惡を摧滅して、悉く善に就かしむ。所思を棄捐して、經戒を奉持し、道法を受行して、違失する所なく、終に度世・泥洹の道を得しむ。佛のたまわく。汝、今、諸天・人民および後世の人、佛の經語を得て、まさに熟つらこれをおもつて、能くその中において、心を端し行を正すべし。主上、善を為して、その下を率化せよ。転相勸

① 明レ起痛

② 明レ燒生惡痛(三)、明レ燒苦毒一

③ 明レ燒起惡

④ 明レ惡起痛

⑤ 明レ善(三)、牒二前惡相一

⑥ 顯レ佛悲相一

⑦ 滅レ惡就レ善(二)、令レ修二

世善一

⑧ 令レ修二出世(二)、出世

因

⑨ 出世果

⑩ 勸二入修捨(二)、如来勸

修(三)、拳三道理二勸(二)、正

勸二修捨(二)、勸二自行一

⑪ 勸化他(二)、勸二修善一

令して、各おの自ら端しく守るべし。聖を尊み善を敬い、仁慈あつて博く愛せよ。佛語の教誨、敢えて虧負することなかれ。まさに度世を求めて、生死・衆悪の本を抜断すべし。まさに三塗・無量の憂畏・苦痛の道を離るべし。汝等、ここにおいて、広く徳本を植えよ。恩を布き施恵して、道禁を犯ざることなく、忍辱と精進と一心と智慧とをもつてすべし。転相教化して、徳を為し善を立てよ。正心正意にして、齋戒清浄なること、一日一夜すれば、無量寿国に在つて、善を為すこと百歳するに勝れたり。所以は何ん。かの佛の国土は、無為自然にして、皆衆善を積んで、毛髮の悪なし。ここにおいて善を修すること、十日十夜すれば、他方諸佛の国土において、善を為すこと千歳するに勝れたり。所以は何ん。他方の佛国は、善を為す者は多く、悪を為す者は少なし。福德自然にして、造悪なき地なり。ただ、この間のみ悪多くして、自然なることあることなし。勤苦求欲して、転相欺給す。心勞し形困しんで、苦を飲み毒を食らう。かくのごとく恩務して、いまだかつて寧息せず。吾れ、汝等天人の類を哀れみて、苦心に誨諭して、教えて善を修せしめ、器に随つて開導して、經法を授与するに、承用せずということなし。意の所願にあつて、皆得道せしむ。佛の遊履する所の、国邑・丘聚、化を蒙らずということなし。天下和順し、日

28 勸ニ離惡一

29 对嘆令レ修(一)、对西方二

嘆(一)、比拔頭勝(一)、拳二

修善(一)、自行

29 化他

29 正比拔

29 顯ニ最勝、由一

29 对二他方嘆(一)、比拔頭

勝

29 顯ニ最勝、由一

28 拳現在(勸(一)、勸修善

月清明なり。風雨、時をもつてして、災厲起らず。国豊かに、民安んじて、兵
 戈用いることなし。徳を崇め仁を興して、務めて礼讓を修す。佛のたまわく。
 我れ、汝等諸天・人民を哀愍すること、父母の子を念ずるよりも甚だし。今我
 れこの世間において作佛して、五悪を降化し、五痛を消除し、五焼を絶滅し、
 善をもつて悪を攻め、生死の苦を抜き、五徳を獲て、無為の安きに昇らしむ。吾
 れ、世を去つて後、經道漸く滅し、人民諂偽にして、また衆悪を為し、五焼
 五痛、還して前の法のごとくならん。久しくして後、轉劇し。悉く説くべか
 らず。我れ、ただ汝が為に、略してこれをいうのみ。佛、彌勒に語げたまわく。
 汝等、各おの善くこれを思い、転相教誡して、佛の經法のごとくせよ。犯す
 ることを得ることなかれ。ここに於いて、彌勒菩薩、合掌してもうしてもうさ
 く。佛の所説甚だ苦なり。世人、実にしかなり。如来、普慈をもつて哀愍し
 て、悉く度脱せしめたまはす。佛の重誨を受けて、敢えて違失せじ。
 佛、阿難に告げたまわく。汝、起ちてさらに衣服を整え、合掌し恭敬して、
 無量寿佛を礼したてまつるべし。十方国土の、諸佛如来、常に共に、かの佛の
 無著無礙を称揚し讚歎したまはす。ここに於いて、阿難、起つて衣服を整え、正
 身西面し、恭敬し合掌して、五体を地に投じて、無量寿佛を礼したてまつる。

26 勸滅惡一

27 挙二滅後一勸二、挙二滅
後衰損一

28 正勸二人修捨一

29 彌勒領解二、正明二領
解一

30 顯三已奉行一

31 明二智慧二、挙二得失二
顯二智慧一、命二阿難礼
二、勸二敬礼一

32 明二礼由一

33 承レ命敬礼二、正設二敬
礼一

④① もうしてもうさく、世尊せそん。願ねがわくはかの佛ほとけの安樂國土あんらくこくどおよび諸もろもろの菩薩ぼさつ・声しやう聞もん大衆だいしゆを見みたてまつらん。この語ことばを説ときおわるに、即時そくじに無量壽佛むりやうじゆぶつ、大光明だいこうみんを放はなつて、普あまねく一切いっさいの諸佛世界しよぶつせかいを照てらしたまう。金剛罍山こんごういせん・須弥山王しゆみせんおう・大小だいしやうの諸山しよせん、一切いっさいの所有しやうゆ、皆みな同じく一色いっしきなり。譬たとえば劫水こくすいの世界せかいに弥満みまんして、その中の万物もつ、沈没ちんぼつして現げんぜず。湍たう・濇せう・汗あせとして、ただ大水だいすいのみを見みるがごとし。かの佛ほとけの光明こうみんも、またかくのごとし。声聞しやうもん・菩薩ぼさつ、一切いっさいの光明こうみん、皆みな悉ことごとく隱蔽おんぺいして、ただ佛光ぶつこうの、明曜みやう顕赫けんかくなるを見みたてまつる。その時に、阿難あなん、すなわち無量壽佛むりやうじゆぶつを見みたてまつるに、威徳いとく巍巍ぎぎたること、須弥山王しゆみせんおうの、高たかく一切いっさいの諸もろの世界せかいの上うへに出いづるがごとし。相好そうごう光明こうみん、照曜しやうようせずといふことなし。この会の四衆ししゆ、一時いちじに悉ことごとく見みたてまつる。彼かこよりこの土ちを見みることも、またかくのごとし。

④① 啓請きせう求もと見み

④② 彌陀光照みだくわう三さん、法ほふ

④③ 譬たと

④④ 合あは

④⑤ 因いん・光相くわうさう一見いつけん二に、此見こゝけん

④⑥ 彼か二に、阿難見あなんけん仏ぶつ

④⑦ 四衆見ししゆけん佛ぶつ

④⑧ 彼見かけん此こ

④⑨ 正弁せいべん三得失さんとくじつ二に、顯得けんとく

④⑩ 三問二答さんもんにたふ莊嚴じやうげん一いつ

④⑪ 問二答もんにたふ說法せふぽふ一いつ

④⑫ 問二答もんにたふ人民じんみん一いつ

國の人民、百千由旬の七宝の宮殿に乗じて、障礙あることなく、徧く十方に
 至つて、諸佛を供養す。汝、また見るやいなや。対えてもうさく。すでに見たて
 まつる。かの國の人民、胎生の者あり。汝、また見るやいなや。対えてもうさ
 く。すでに見たてまつる。その胎生の者の、処する所の宮殿、あるいは百由旬、
 あるいは五百由旬、各おのその中において、諸もろの快樂を受くること、切利
 天上のごとくにして、また皆自然なり。

その時、慈氏菩薩、佛にもうしてもうさく。世尊。何の因、何の縁あつてか、
 かの國の人民、胎生・化生なる。佛、慈氏に告げたまわく。もし衆生あつて、
 疑惑の心をもつて、諸もろの功德を修して、かの國に生ぜんと願ぜんに、佛智・
 不思議智・不可称智・大乘広智・無等無倫最上勝智を了せず。この諸もろの
 智において、疑惑して信ぜず。しかれどもなお罪福を信するをもつて、善本を修
 習して、その國に生ぜんと願ず。この諸もろの衆生、かの宮殿に生じて、寿五
 百歳までに、常に佛を見たてまつらず。經法を聞きたてまつらず。菩薩・声
 聞聖衆を見たてまつらず。この故にかの國土において、これを胎生という。も
 し衆生あつて、明らかに佛智乃至勝智を信じて、諸もろの功德を作して、信心
 廻向すれば、この諸もろの衆生、七宝の華の中において、自然に化生して、跏

①④ 顯失(一)、顯胎生失(一)

④、顯胎生果(一)、直問答

①⑤ 弁胎生(一)

①⑥ 対因顯果(一)、彌勒問

①⑦ 如来答(一)、明胎生(一)

弁(一)、明因(一)、総明

①⑧ 別説

①⑨ 明果

①⑩ 結

①⑪ 明三化生(一)、明因

①⑫ 明果

蹴して坐す。須臾の頃に、身相光明・智慧功德、諸もろの菩薩のごとく、具足し成就す。

②③ また次に、慈氏。他方佛国の諸大菩薩、発心して、無量寿佛を見たてまつり、および諸もろの菩薩・声聞の衆を恭敬し供養せんと欲すれば、かの菩薩等、命終して無量寿国に生ずることを得て、七宝の華の中において、自然に化生す。

彌勒、まさに知るべし。かの化生の者は、智慧勝れたるが故なり。その胎生の者は、皆智慧なきをもつて、五百歳の中において、常に佛を見たてまつらず。

經法を聞かず。菩薩・諸もろの声聞衆を見ず。佛を供養するに由なし。菩薩の法式を知らず。功德を修習することを得ず。まさに知るべし。この人は、宿世の時、智慧あることなくして、疑惑せしが致す所なり。

佛、彌勒に告げたまわく。譬えば転輪聖王の、別に七宝の宮室あつて、種種に莊嚴し、牀帳を張設し、諸もろの繪幡を懸けたらんに、もし諸もろの小王子あつて、罪を王に得れば、すなわちかの宮中に内れて、繫ぐに金鎖をもつて

す。飲食・衣服・牀褥・華香・妓樂を供給すること、転輪王のごとくにして、乏少する所なきがごとき、意において云何ぞ。この諸もろの王子、むしろかの処を楽わんやいなや。②④ 對えてもうさく。いななり。ただ種種に方便して、諸もろ

②③ 對レ勝顯レ劣(二)、孝三化生勝一

②④ 頭二胎生劣一

問 寄レ喻顯レ過(三)、如来喩

彌勒順答

②⑦ 如来合譬

の大力を求めて、自ら免れ出でんことを欲せん。佛、彌勒に告げたまわく。この諸もろの衆生も、またかくのごとし。佛智を疑惑せしをもつての故に、かの宮殿に生じて、刑罰乃至一念の悪事あることなく、ただ五百歳の中において、

②⑧ 勸令ニ修捨(一)、正勸ニ修捨一

三宝を見たてまつらず。供養して、諸もろの善本を修することを得ず。これをもつて苦とす。余樂ありといえども、なおかの処を樂わず。もしこの衆生、その本罪を識つて、深く自ら悔責し、かの処を離れんことを求むれば、すなわち意のごとく、無量寿佛の所に往詣して、恭敬し供養することを得、また徧く無量無數の諸余の佛の所に至つて、諸もろの功德を修することを得。彌勒、まさに知るべし。それ、菩薩あつて、疑惑を生ずる者は、大利を失せりとす。この故に、まさに明らかに諸佛の無上智慧を信ずべし。

②⑨ 結勸ニ修学一

彌勒菩薩、佛にもうしてもうさく。世尊。この世界において、幾ばく所の不退の菩薩あつてか、かの佛国に生まるや。佛、彌勒に告げたまわく。この世界において、六十七億の不退の菩薩あつて、かの国に往生す。一一の菩薩、すでにかつて無數の諸佛を供養すること、次いで彌勒のごとき者なり。諸もろの小行の菩薩および少功德を修習する者、稱つて計うべからず。皆まさに往生すべし。佛、彌勒に告げたまわく。ただ我が刹の諸もろの菩薩等のみ、かの国に往

③① 小菩薩等往生

③② 他土往生(一)、総標

生するにあらず。他方の佛土も、またかくのごとし。その第一の佛を、名づけて
 遠照という。彼に百八十億の菩薩あり。皆まさに往生すべし。その第二の
 佛を、名づけて宝蔵という。彼に九十億の菩薩あり。皆まさに往生すべし。
 その第三の佛を、名づけて無量音という。彼に二百二十億の菩薩あり。皆
 まさに往生すべし。その第四の佛を、名づけて甘露味という。彼に二百五
 十億の菩薩あり。皆まさに往生すべし。その第五の佛を、名づけて龍勝とい
 う。彼に十四億の菩薩あり。皆まさに往生すべし。その第六の佛を、名づけて
 勝力という。彼に万四千の菩薩あり。皆まさに往生すべし。その第七の佛
 を、名づけて師子という。彼に五百億の菩薩あり。皆まさに往生すべし。そ
 の第八の佛を、名づけて離垢光という。彼に八十億の菩薩あり。皆まさに往
 生すべし。その第九の佛を、名づけて徳首という。彼に六十億の菩薩あり。
 皆まさに往生すべし。その第十の佛を名づけて妙徳山という。彼に六十
 億の菩薩あり。皆まさに往生すべし。その第十一の佛を、名づけて人王とい
 う。彼に十億の菩薩あり。皆まさに往生すべし。その第十二の佛を、名づ
 けて無上華という。彼に無數不可称計の諸もろの菩薩衆あり。皆不退転にし
 て、智慧勇猛なり。すでにかつて無量の諸佛を供養して、七日の中において、す

なわち能く百千億劫に大士の修する所の堅固の法を撰取せり。これらの菩薩、皆まさに往生すべし。その第十三の佛を、名づけて無畏という。彼に七百九十億の大菩薩衆あり。諸もろの小菩薩および比丘等、稱つて計うべからず。皆まさに往生すべし。佛、彌勒に語げたまわく。ただこの十四佛国の中の諸もろの菩薩等のみ、まさに往生すべきにあらず。十方世界の無量の佛国より、その往生する者も、またかくのごとく、甚だ多くして無数なり。我れただ十方諸佛の名号および菩薩比丘の、かの国に生ずる者を説くこと、昼夜一劫すとも、なおいまだ竟ること能わず。我れ今汝が為に、略してこれを説くのみ。

③⑤ 無量往生

③⑥ 総結ニ往生

○第三

佛、彌勒に語げたまわく。それ、かの佛の名号を聞くことを得ることあつて、歡喜踊躍して、乃至一念せんに、まさに知るべし、この人、大利を得たりとす。すなわちこれ無上の功德を具足す。この故に、彌勒。たとい大火、三千大千世界に充滿することありとも、要すまさにこれを過ぎて、この經法を聞きて、歡喜信樂し、受持し誦誦し、説のごとく修行すべし。所以は何ん。多く菩薩あつて、この經を聞かんと欲すれども、得ること能わず。もし衆生あつて、この經を聞く

○第三流通四

① 嘆レ經勸レ学因、勸ニ持念佛一因、称名功德

② 举レ難勸レ聞

③ 聞名利益

者は、無上道において、ついに退転せず。この故に、まさに専心に信受し、持
 誦し説行すべし。佛のたまわく。吾れ今、諸もろの衆生の為に、この経法を
 説き、無量寿佛およびその国土の一切の所有を見せしむ。まさになすべき所
 の者をば、皆これを求むべし。我が滅度の後をもつて、また疑惑を生ずることを得
 ることなかれ。⑥当來の世、経道滅尽せんに、我れ慈悲をもつて哀愍して、特り
 この経を留めて、止住すること百歳ならん。⑦それ、衆生あつて、この経に値
 う者は、意の所願に随つて、皆得度すべし。佛、彌勒に語げたまわく。如來の興
 世には、値い難く見難し。諸佛の経道は、得難く聞き難し。菩薩の勝法・諸波
 羅蜜、聞くことを得ることまた難し。善知識に遇つて、法を聞いて能く行ずるこ
 と、これまた難しとす。もしこの経を聞きて、信樂し受持すること、難が中の難
 なり。この難に過ぎたるはなし。⑧この故に、我が法は、かくのごとく作し、かく
 のごとく説き、かくのごとく教う。まさに信順して、如法に修行すべし。

⑩ 開經得益(一)、發願、益
 ⑪ 得道益(二)、小乘益
 ⑫ 大乘益

④ 正勸三信行

⑤ 勸二人除疑

⑥ 指二留經時

⑦ 明三念佛益

⑧ 拳ノ難勸ノ信(一)、繪拳ノ難

⑨ 別拳ノ難

⑩ 結勸二修行

し。⑭ その時、三千大千世界、六種に震動す。大光、普く十方の国土を照らし、百千の音楽、自然にして作し、無量の妙華、紛紛として降る。佛、經を説きたまうことおわつて、彌勒菩薩および十方來の諸もろの菩薩衆・長老阿難・諸もろの大声聞・一切の大衆、佛の所説を聞きて、歡喜せずということなかりき。

⑭ 現レ瑞表レ実
大衆同喜

佛説無量壽經 卷下